

加古祐二郎と立命館

—「加古研究会」余滴—

大橋 智之輔
村田 淳

加古祐二郎との出会い

大橋が加古祐二郎の名前を知ったのは一九五〇年、大学に入学した年である。出版社の倒産により、『理論法学の諸問題』—以下『諸問題』と略す—が古本屋の店頭に山積みされていた。同じ出版社から出ていた沼田さんの『日本労働法論』上巻、中巻も並んでいた。法解釈学よりも法哲学や法制史にどちらかと言えばまだ関心のあった大橋であるが、正直言って十分に理解できなかった。「進歩的学者や秀才学生のみが（ホトホトかぶとをぬぎ）ながらもどうにか理解しようとするにすぎなかった難解な理論的労作」（沼田稻次郎「加古祐二郎の法哲学」、恒藤・沼田編『近代法の基礎構造』—以下この書への参照は『構造』と略する—三三七頁）を、法学のイロハも知らぬ者が読むのであるから当然であるが。

当時、古書で求めたバシユカーニス・佐藤栄訳『マルクス主義と法理学』を読み始めており、法律物神性

や道徳物神性等の言葉に惹かれていた。折から民科法律の学生組織の数名が宮内裕さんにtutorをお願いして「パシユカーニスの読書会」を作った。宮内さんのお宅を訪問しての輪読会であった。先ず宮内さんから佐藤訳の甚だしい誤訳部分の訂正があり、次いで内容の検討・理解に努めると言う形を取った。その時、宮内さんから「誰が加古法学を継承するか?」と言う期待と激励の言葉があったと記憶している。再び『諸問題』に出会うのは翌年、同じく学生民科の研究会の一つとして、「労働法研究会」を片岡昇さんにtutorをお願いして開始した時である。この頃、所謂「社会政策論争」を背景に労働法・社会法の性格をどの様に捉えるべきかに関心があり、片岡さんの示唆を受けて社会法概念の展開を追いかける事にした。橋本文雄さん『社会法の研究』の中からRadbruchの「法における人間」や、「個人法から社会法へ」の紹介を、そして加古さんの「法的主体より見たる社会法」に紹介されているSinzheimerの「法における人間の問題」を経て加古さん自身の社会法の捉え方を辿ると言う計画である。橋本さんの著書は入手しがたく、邦訳『ラートブルフ著作集』も未だ刊行されていない時期であったので、『諸問題』を別として、研究会のメンバーに予め渡すテキスト作成に随分苦労した事を思い出す。コピー機はなくガリ版で書き写すか回覧で予習するしか出来なかった時代であったから。

その後、五二年に加藤新平さんの「法理学ゼミ」でパシユカーニスを扱った時、又その頃Harvard U. P. から出た『二〇世紀の世界の法哲学シリーズ』として英訳された、『Soviet Legal Philosophy』に収録されていたパシユカーニスの「自己批判」を含めた英訳書を読んだ時等に『諸問題』に戻る機会があった。

村田は一九六五年に法政大学法学部に入学したが、法律家になるつもりは殆どなく、すぐに学生団体の「法

「社会学研究会」に参加し、翌年は福島県いわき市常磐地区、翌々年は愛知県常滑市鬼崎地区の実態調査に加わる。この調査を通じて、法律が社会を作り出すのではなく、社会が法律を左右している事を強く知らされた。ゼミは哲学（大橋担当）を取る。テキストがラートブルフであったのでカント・新カント派関係の書物も読み始めるが、所属の研究会の影響からマルクスや川島武宜さんの『所有権法の理論』等に代表される書籍を主に見ていた。その頃『構造』に出会い、殆ど理解出来なかったが「何か原石の輝き」の様なものを感じた。六九年卒業して明治大学大学院に入る。丁度、中村雄二郎さんのゼミで『構造』が使用された。その後、加古さんに「のめりこみ」、修士論文を「加古祐二郎の法理学」とし、加古さんの「日記」を見せて貰いに宮本正清さんを二度訪問し（村田「宮本正清と加古祐二郎」『みすず』二七一号所収）、立命館大学図書館で加古文庫を調査・閲覧した。更に、加古さんの少年時代からの親友である前尾繁三郎さんの許しを得て、前尾家に所蔵されている加古さんの蔵書の最後の部分（「蔵書三」）を調べる事もできた（村田「故前尾繁三郎所蔵の加古祐二郎の蔵書について」『みすず』二九六、二九八号参照）。加古さんの蔵書関係についての調査結果は後述の通りである。その他、加古さんの兄、哲太郎さんと甲南高校以来の友人である村尾喜夫さん、大学院以来の友人石本雅男さん等、又、思考の傾向が加古さんと多分に交錯するように思われる梯明秀さんのお話を伺う事になる。加古さんに対する村田の捉え方は、実践的主体的存在の側面を重視する事は言うまでもないが「西田哲学の法律学における唯物論的改作」と見る梯さんに近い。

「加古研究会」の発足

村田が宮本正清さんの許で筆写した加古さんの日記―以下「日記」と省略する。それは、大橋・名和田・福井・藤田・村田編著『昭和精神史の一面』法政大学現代研究所叢書一一、法政大学出版局、一九九一所収の加古さんの「日記」C及びDに対応する。上記図書は以下『断面』と略する―の存在は、加古さんに関心のある者の間では知られていた。或る時、藤田さんと大橋との間で「日記」の事が話題になり、公表できぬものか話し合う機会があった。村田も独自に公刊の可能性を探り、二、三の出版社とある程度迄、話が進捗したものの、結局は日の目を見るには到らなかった。そのうちに大橋の所属する法政大学の現代法研究所で、「加古祐二郎と京都学派」の研究組織が認められた。そこで、「加古法理論」の研究と、その成果の発表の際に「日記」をも公表する事にした。そして当時の時代状況を把握する為、「日記」の再検討・補訂、加古さんと親しかった人達へのヒアリングを行う事を計画した。幸い、加古さんの縁に連なる園部逸夫さんから「日記」原本その他の資料を拝借する事が出来、又相当数の人達からお話を聞く機会を得た。なにぶん決められた期間内の作業である為、重要な係わりのある森順次さんや田中直吉さん等々にインタビューの機会を得ず、また資料探しに心残りの部分も沢山ある(一九三三年一月創刊号のみで幕を閉じた『法の研究』(改造社)との係わりや、石堂清倫さんが一九三五年、京都に於ける反ファシズムの新しい文化運動のグループ「世界文化」の人達と会合して―そこに加古さんも居た―相談したと言われる、世界の反ファシズム思想家を紹介する出版企画との係わり等に至っては、恐らく資料の片鱗さえも発見できないであろうが。前者につ

いては、野村平爾「戦前の民主主義法学・覚え書」『法律時報』一九六五年四月、五五頁、『社会科学研究』七卷二・三・四合併号所収の「日本におけるソヴェト法研究―山之内一郎教授に聞く―」二二五―六頁、一九五六年三月、後者については石堂清倫『我が異端の昭和史』一八二―三頁参照。

前書き部分が長くなったが、以下(一) 加古さんの蔵書について、(二) 沼田稲次郎さんから伺ったお話、(三) 梯明秀さんにお聞きした話について記述しようと思う。

(以上、文責、大橋)

(一) 加古さんの蔵書について

加古さんの蔵書については、その大部分が立命館大学に「加古文庫」として保存された事は一九四二年刊の『加古文庫のしをり』で周知の事である。今、この『しをり』記載のリスト―仮に「蔵書一」とする、それは洋書七六八冊、和書五一七冊、計一二八五冊である。―を基準にすると、村田が、一九七〇年九月と七一年八月に「蔵書一」と在庫を照合した時、「加古文庫」とラベルが貼ってあるものは洋書八六八冊、和書六四九冊で合計一五一七冊であった。どの様な事情があったか判然としないが、立命館で所蔵されながら「蔵書一」から除かれたこの差二三二冊を「蔵書二」とする。尚、その時点で貸出中や紛失したものが二九五冊であるとの事であった。後にお話を伺った梯明秀さんも「私も持ち出した犯人だと疑われた」と語っておられた。一九七一年一月二〇日発行の『立命館学園広報』に掲載された「加古文庫」(宮西 寅生)という文書によると「加古文庫の蔵書構成(日本十進分類法)では洋書二一三冊、和書二九八冊、計五一一となる。

数字の単位が記載されていないので、どの様な数え方をしたか不明であるが、在庫調べをした時の一五七冊の三分の一とはどういう事なのであろうか。その他に戦後、前尾繁三郎さんの京都のお宅に保存される事になった図書三〇三冊―これを「蔵書三」とする―がある。「蔵書三」の存在については、一九八七年に大橋が天野和夫さんに聞いた所、前尾さんの秘書のひと、立命館が譲り受ける事で合意が成立し、後は夫人の返事を待つばかりであるとの事であった。天野さんによれば、加古さんの蔵書はその部分を含めれば全てになり、宮津市に建設された前尾文庫には無いはずだと言われた。尚、念の為に藤田さんと大橋が前尾文庫の調査に赴いた。膨大な蔵書の中から社会科学・哲学部門のみを調べたに過ぎないが、その中に加古さんの母堂、久さんが前尾さんに献呈した署名入りの『諸問題』も並べられていた。社会科学関係の図書には戦前の共産主義関連の図書数点がある。中は×ばかりの文章が続くが、根気よく対応する文字を補填しているのが気になった。たとえばブハーリン著、広島定吉訳『史的唯物論の理論』（マルクス主義叢書No.五、普及三版、白楊社、昭和二年）二頁「・・・×××××××。」と×が四四続く文章に「権力掌握後労働者階級は自国外の資本主義諸国家及自国中の反革命の残党と闘争しなければならぬ」と埋め込んである。その他、引用文献に対するドイツ語書名、頁が記入され、欄外に多くの書き込みがある。但し、フィンゲルト、シルヴェント共著『史的唯物論教程』プロレタリア科学研究所ソヴェート科学研究会訳、共生閣、一九三一年にも同一筆跡の書き込みが多数あるが、「第七章イデオロギー」には朱線も注記も全く無い点から推測するに、加古さんとは無関係と思われる。

以下は村田が調査した「蔵書二」「蔵書三」に関する感想及びリストである。

すでに述べた様に、「蔵書二」を「蔵書一」から分離させた理由は判らない。何しろ昭和一七年の事であるから、左翼思想に対する一層の配慮を働かし、公刊される『しをり』から左翼共産主義関連との印象を与える書名を出来るだけ除いたものと推測出来る。当時立命館大学は東条に逆らった石原莞爾を教授として受け入れてもいたが、それなら何故、アリストテレス、ホッブス、カント、フィヒテ、デイルタイ等の図書があるのか、他方、「蔵書一」にも決して多くはないがマルクス、カウツキー、コルシュ、ルカーチ等が含まれている。和書に関しても同様であるが、左翼関連図書を除外したとの印象は一層強い。尚、以下に示す「蔵書二」は「蔵書一」に倣って「Foreign book VII」「和書VI」と表示し、和書の発行年月日は「蔵書一」同様につけなかった。

「蔵書二」リスト

- 一 Adler, Max. Die Staatsfassung des Marxismus. (Marx-Studien)
- 二 Marx-Studien. herausg. by Max Adler und Rudolf Hilferding. 1928.
- 三 Aristoteles. Metaphysik (Philos. Bib.) 3Aufl. 1928.
- 四 Ashley, William. An Introduction to English Economic History and Theory. 1920.
- 五 Beer, Max. Karl Marx Eine Monographie. 1922.
- 六 Bela-Kum. La Social-Démocratie contre la Marxisme. 1933.
- 七 Bucharin, N. Theorie des Historischen Materialismus. 1922.

- 八 Bucharin, N. Der Weg zum Sozialismus. 1925.
- 九 Bucharin, N. Die Politische Ökonomie des Rentners. (Marxisti. Bid.) 1926.
- 一〇 Bucharin, N. Imperialismus und Weltwirtschaft. (Marxistische Bibliothek) 1929.
- 一一 Bucharin, N. Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals. (Marxistische Bibliothek) 1929.
- 一二 Boukharine, N. La situation extérieure et intérieure de l'U.R.S.S. 1927.
- 一三 Cunow, Heinrich. Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie, Grundzüge der Marxschen Soziologie. 1923.
- 一四 Deborin, A. Lenin Der Kämpfende Materialist. 1924.
- 一五 Diehl, Kerl und Mombert, Paul. (herausg.) Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Ökonomie. 1922.
- 一六 Dilthey, Wilhelm. Gesammelte Schriften. Band 2. Weltanschauung und Analyse des Menschen Seit Renaissance und Reformation.
- 一七 Dunn, Robert W. Soviet Trade Unions. 1928.
- 一八 Engels, Friedrich. Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. (Elementarbücher des Kommunismus.)
- 一九 Engels, Friedrich. Die Tage der Arbeitenden Klasse in England. Achte Auflage. 1923.
- 一〇 Engels, Friedrich. Der Ursprung der familie, des Privateigentums und des Staats. 1922.
- 一一 Engels, Friedrich. Grundsätze des Kommunismus. herausgegeben von Eduard Bernstrin. 1923.

- ||| Engels, Friedrich. Herr Eugen Duhrings Umwälzung der Wissenschaft. 3mölfe, und erändernde Auflage. 1923.
- ||| Engels, Friedrich. Der deutsche Bauernkrieg. heraus. von Hermann Duncker. 1925.
- ||| Engels, Friedrich. Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen Philosophie. 1927.
- ||| Engels, Friedrich. Zur Wohnungsfrage. (Elementarbücher des Kommunismus Band 17) 1930.
- ||| Fichte, J. G. Rechtslehre. heraus. Hans Schulz. 1920.
- ||| Flesch, Karl. Dem Vorkamper für ein soziales deutsches Arbeitrecht. 1920.
- ||| Gide, Charles. Principles of Political Economy. 1924.
- ||| Hartmann, Nicolai. Zum Problem der Realitätsgegebenheit Philosophische Vorträge. 32. 1931.
- ||| Hilderding, Rodolf. (herausgegeben von) Die Gesellschaft.
- ||| Hobbes, Thomas. Grudzüge der Philosophie Erster Teil Lehre von Körper. 1915.
- |||—||| Husserl, Edmund. Logische Untersuchungen. zweiter Band 2 Teil. 1921.
- ||| Kant, Immanuel. Critique of Pure Reason. trans. by J.M.D. Meiklejohn. 1924.
- ||| Kautsky, Karl. (eräutert.) Das Erfurter Programm. In feinem grün dasslichen Teil. 1922.
- ||| Kropotkin, P. A. The Conquest of Bread. 1927.
- ||| Lassalle, Ferdinand. Über Verfassungswesen. (Elementarbücher des Kommunismus.) 1923.
- ||| Lenin, W. I. Die Voraussetzungen der ersten russischen Revolution 1894-1899, 1932.
- ||| Lenin, N. Agitation und Propaganda. (Marxistische Bid.) 1929.

- 四〇 Lenin, W. I. Die Revolution von 1917. Sämtliche Werke Band 20. 1928.
- 四一 Lenin, W. I. Materialismus und Empiriokritizismus. Sämtliche Werke Band 13. 1927.
- 四二 Lenin, W. I. Der Imperialismus als höchstes Studium des Kapitalismus. 1931.
- 四三 Lenin, W. I. Der Imperialismus und der Imperialistische Weltkrieg. Ausgewählte Werke Band5. 1933
- 四四 Lenin, W. I. Briefe an Maxim Gorki 1908-1913.1924
- 四五 Lenin, W. I. Über Organisationsfragen. 1924.
- 四六 Lenin, N. Über Gewerkschaften. (Marxistische Bibliothek) 1927.
- 四七 Lenin, N. La Révolution Proletarienne et le renget Kautsky.1925.
- 四八 Lenin, W. I. Die Periode der "Iskra" 1900-1902.1920.
- 四九 Lenin, ロシア語版 何々々々々。1930
- 五〇 Lenz, J. Aktuelle Probleme der proletarischen Politik Elementar Bücher des proletarischen Klassenkampfes Band 2. 1927.
- 五一 Léon-Saint-Martin. Les Deux G.G.T. Syndicalisme et Communisme.
- 五二 Lukács, Georg. Geschichte und Klassenbewusstsein. Studien über Marxistische Dialektik. 1923.
- 五三 Lukács, Georg. Lenin:Studie über den Zusammenhang seiner Gedanken. 1924.
- 五四 Luppol, I. Lenin und die Philosophie. (Marxiti. Bid.) 1929.
- 五五 Luxemburg, Rosa. Die Russische Revolution. 1922.

- ㄱㄷ Marck, Siegfried. Reformismus und Radikalismus in der deutschen Sozialdemokratie.
- ㄱㄸ Marx, Karl. Karl Marx und die Gewerkschaften. herausgegeben und eingeleitet von Friedrich Herneck.
- ㄱㄹ Marx, Karl. Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848-1850.1925.
- ㄴㄱ Marx, Karl. Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte 1922.
- ㄴㅇ Marx, Karl. Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte neue ergänzte Ausgabe. mit einem Vorwort von F. Engels.
- ㄴㄱ | Marx, Karl. Engels, Friedrich. Historisch kritisch Gesamtausgabe, Werke/ Schriften/ Briefe, Erste Abteilung, Band 3. 1932.
- ㄴㄴ | More, Thomas. Thomas More und Seine Utopie. mit einer historischen Einleitung von Karl Kautsky. 1920.
- ㄴㄴ | Nicolai, Helmut. Volk, Recht, Wirtschaft in Dritten Reich. 1933.
- ㄴㄴ | Oppermann, Walther. Die rechtsphilosophischen Grundlagen des heutigen deutschen Arbeitsrechts. 1927.
- ㄴㄴ | Plechanoff, George. Anarchism and Socialism.
- ㄴㄴ | Plekhanov, G. V. Les questions fondamentales du marxisme.
- ㄴㄴ | Plechanow, G. Die Grundprobleme des Marxismus. 1922.
- ㄴㄴ | Plechanow, G. Beiträge zur Geschichte des Materialismus. 1921.
- ㄴㄴ | Pohle, Ludwig. Kapitalismus und Sozialismus. 1921.
- ㄴㅇ Radek, K. Die Entwicklung des Sozialismus von der Wissenschaft zur Tat. 1924.

- 卅一 Reimes, W. Ein Gang durch die Wirtschaftsgeschichte. 1922.
- 卅二 Riazanov, D. (herausgegeben von) Marx-Engels Archiv.
- 卅三 Riazanov, D. (//)Karl Marx als Denker. Mensch und Revolutionär. 1928.
- 卅四 Rogers, R. A. P. A Short History of Ethics. 1921.
- 卅五 Stalin, J. Probleme des Leninismus. (Marxistische Bid.) 1926.
- 卅六 Stalin. Auf dem Wege zum Oktober. (Marxistische Bid.)
- 卅七 Stalin, Zinoviev. Kaenev. Leninism or Trotskyism. 1925.
- 卅八 Thalheimer, A. Einführung in den dialektischen Materialismus. (Marxistische Bid.) 1928.
- 卅九 Thalheimer, A., Deborin. Soiznas Stellung in der Vorgeschichte des Dialektischen Materialismus. (Marxistische Bid.) 1928.
- 八〇 Ullrich, Zdenk. Einige Gedanken zur Soziologie der Revolution. 1927.
- 八一 Untermann, Ernest. The World's Revolutions. 1906.
- 八二 Untermann, Ernest. Science and Revolution. 1920
- 八三 Yarga, Eugen. (herausgegeben von) Die Sozialdemokratischen Parteien ihre Rolle in der internationalen Arbeiterbewegung der Gegenwart. 1926.
- 八四 Weber, Marianne. Fichte's Sozialismus und sein Verhältnis zur Marxschen Doktrin. 1925
- 八五—九〇 Unter den Banner des Marxismus.
- 九一—九四 Die Kommunistisch Internationale.

- 九五 Rational Basis of Legal Institution. Modern Legal Philosophy Series. 1923.
九六 Kant-Studien. Band 39.
九七 Die aktuellen Probleme der internationalen kommunistischen Bewegung. Thesen und Resolutionen 1926.
九八 Programme de L' International Communiste.
九九 Der Staat, das Recht und die Wirtschaft das Bolschewismus 1925.
一〇〇 Die Sozialversicherung nach den neuesten Stand der Gesetzgebung. 1928.

和書IV

- 一 改良主義のイデオロギー批判 エス・アレキサンダー著 松本篤一訳
二 現代自然科学の弁証法による反省 伊豆公夫著
三 帝国主義研究 猪俣津南雄著
四 金の経済学 ”
五 安定後に於ける資本主義没落期の経済 ヴァルガ著
六 日本経済批判 ヴァルガ監輯 世界情勢研究会訳
七 マルクス主義労働者教程 経済学 プロレタリア科学研究所訳
八 シュミットに与えたエンゲルスの手紙 久留間鮫造訳
九 欧州諸国戦後の新憲法 美濃部達吉訳

- 一〇 農業の社会化 カウツキー著
- 一一 農業経済学 ”
- 一二 改訳 資本論解説 カウツキー著 高島素之訳
- 一三 マルクス資本論略解 第一卷 第三分冊 河上肇著
- 一四 唯物史観研究 河上肇著
- 一五 人口問題批判 ”
- 一六 訂正 経済原論 ”
- 一七―二〇 資本論入門 第一卷一、三、四、五分冊 ”
- 二一 マルクス主義哲学の現段階 共産主義アカデミー編 永田広志訳
- 二二 貨幣及信用理論 共産アカデミー編 河野重弘訳
- 二三 クロポトキン全集 第一卷 一叛逆者の言葉 其他 石川三四郎訳
- 二四 ” 第四卷 田園・工場・仕事場 其他 能智修彌訳
- 二五 プロレタリア政治学入門 コヴレンコ著 茂野清治訳
- 二六 弁証法的・史的唯物論 第二部 史的唯物論 第一分冊 コムアカデミア哲学研究所編 村田春雄訳
- 二七 弁証法的唯物論(全) ミーチン・フリツェウイチ監修 広島定吉訳編
- 二八 「唯物論と経験批判論」研究 コムアカデミア哲学研究所編 永田広志訳編
- 二九 プロレタリア経済学の方法論 コーン著 村田正訳

- 三〇 唯物論、無神論（佐野学集一）
- 三一 日本歴史研究（一）二）
- 三二 国家論、戦争論（一）三）
- 三三 政治論（一）四）
- 三四 露西亞經濟史（一）五）
- 三五 社会史研究（一）六）
- 三六 日本資本主義發達史 サファアロフ著 平館利雄訳
- 三七 古典經濟学の哲学的背景 シェール、ハスバツハ共著 山下芳一訳
- 三八 社会問題講座五 一九二六
- 三九 サヴェート同盟の監獄（法及び国家理論叢書五）シルウインド著 プロレタリア科学研究所訳
- 四〇 レーニン主義の為の斗争 スターリン・ブハーリン著 佐野学、西雅雄編
- 四一 マルクス主義講座Ⅱ 河上肇、大山邦夫監修
- 四二 " III "
- 四三 " XI "
- 四四 " XII "
- 四五 世界經濟と世界政治 第二輯 世界情勢研究会訳編
- 四六 經濟学の根本問題 ソヴェト・アカデミー編 河野重弘訳

- 四七 生産力編（弁証法講座第二編）プロレタリア科学研究所訳
- 四八 獄底の暗に歌ふ 多田基一著
- 四九 独裁政治論 淡徳三郎著
- 五〇 労働組合教程 チェーキン著 高橋実訳
- 五一 カントに於ける弁証法 デボーリン著 宮川実訳
- 五二 唯物弁証法と自然科学（マルキシズム叢書第四冊）デボーリン著 大山一郎訳
- 五三 ドイツ資本主義の危機（世界経済叢書五）経済批判会訳
- 五四 ヨーロッパ経済史 中世 徳増栄太郎著
- 五五 社会経済体系一四 永井亨編
- 五六 マルクス主義と法理学 パシユカーニス著 佐藤栄訳
- 五七 古代社会史 早川二郎著（唯物論全書）
- 五八 反宗教斗争 沖田順川訳編
- 五九 法律における階級斗争 平野義太郎著
- 六〇 マルクス、エンゲルスにおける史的唯物論と法律 平野義太郎編
- 六一 国際法の基本問題 フェルドロツス、パウンド、ル・フェール共著 大沢章、野見山温訳
- 六二 身体と靈魂、肉体と精神の二元論に抗して フォイエルバッハ著（マルキシズム叢書第一五冊）川村三男訳
- 六三 社会の構成Ⅱ並に变革の課程 福本和夫著

- 六四 史的唯物論（社会思想叢書第一編）ブハーリン著 檜崎輝訳
- 六五 世界経済と帝国主義 ブハーリン著
- 六六 帝国主義と資本の蓄積 ブハーリン著
- 六七 マルクス主義の根本問題（マルクス主義選集二）ブレハノフ著 木村春海訳
- 六八 戦斗的唯物論 ブレハノフ著 川内唯彦訳
- 六九 評釈 フォイエルバッハ論 ブレハノフ著 川内唯彦訳
- 七〇 唯物史観序説 プロレタリア科学研究所編
- 七一 法律と階級斗争（プロレタリア講座八）プロレタリア科学研究所編
- 七二 日本農業の特質と危機 プロレタリア科学研究所編
- 七三 社会主義通史 マックス・ベア著 西雅雄、田畑三四郎訳
- 七四 理論斗争 北條一雄著
- 七五 方向転換 北條一雄著
- 七六 唯物史観世界史教程第一分冊（原始共産社会の崩壊より階級社会の発生迄）ボチャロフ、ヨアニシアニ共著 早川二郎訳
- 七七 〃 第三分冊（封建制度の崩壊と資本主義の発生）
- 七八 戦争論（唯物論全書）堀伸二著
- 七九 マルクス主義財政、特に租税論 マルクス、レーニン、バルガ、クニクレンツ共著 四方四郎編訳
- 八〇 フォイエルバッハ論 エンゲルス、マルクス著 佐野文夫訳

- 八一―八五 資本論 カール・マルクス著 高島素之訳 全三卷 全五冊
- 八六一―一二 マルクス・エンゲルス全集 全二五卷 別卷一(欠一〇、一一)(二七冊)
- 一三―一六 マルクス主義の旗の下にNo.1―4 プロレタリア科学研究所訳
- 一七 スピノザと弁証法的唯物論(弁証法的唯物論叢書) ミーチン、ラリツェウツチ著 広島定吉訳
- 一八 近世法学通論(新訂版) 三瀆信三著
- 一九 模範最新世界年表 三省堂版
- 二〇 日本労働組合法研究 山中篤太郎著
- 二一 唯物論者フオイエルバツハ ヨードル、フリードリツヒ著 北村圭之介訳
- 二二 「第三期」世界経済 ラピンスキ、ヴォルガ、ウルム共著 高山洋吉訳
- 二三 ドイチェ・イデオロギー(マルクス・エンゲルス遺稿) リヤザノフ編 由利保一訳
- 二四 マルクス・エンゲルス遺稿 リヤザノフ編
- 二五 帝国主義、民族問題(レーニン著作集第二卷) 青野秀吉訳
- 二六 内外政策(レーニン著作集第七卷) 青野秀吉訳
- 二七 マルクス・エンゲルス マルクス主義(マルクス主義文庫1) レーニン著 瓜生信生、直井武夫訳
- 二八―二九 ロシアに於ける資本主義の発達 上、下 レーニン著 大山岩雄訳
- 三〇 労働組合の指導理論(政治批判叢書第一〇編) 鈴木安蔵訳編
- 三一 無産政党論(現代政治学全集第一卷) 蠟山政道編著

「蔵書三」について触れる前に、前尾さんと加古さんとの関係から述べておこう。前尾さんの記憶によれば、一九一六年（大正五年）加古さんが大阪府堺市から、宮津男子尋常高等小学校の五年に転入した時から親交が始まった。そしてこの関係は加古さんの死ぬまで続き、死後も前尾さんは、加古さんの母堂が亡くなる迄お宅を訪問したり文通を続けていたとの事である（前掲の村田の『みすず』二九六、二九八号所収の記述参照）。前尾さんの許可を得て、村田は一九八〇年二月に「蔵書三」を調査した。これらの図書は加古さんが身近に置いていたものと思われる。その内容は辞書や語学の教本、高校・大学時代の教科書や専門図書、愛読した文学作品等である。そして、これらの蔵書は加古さんの心情や思想傾向をよく表している様に思われた。「蔵書三」は英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の三七冊の洋書と二六六冊の和書、合計三〇三冊からなる。哲学・思想部門ではドイツ系を中心にスピノーザ、パスカル、ルソー等を含めて三〇冊、法律学では当時の代表的な学者の図書五四冊と洋書一冊、経済学では改造社版『経済学全集』一八冊を中心に二六冊である。

文学・芸術関係では、芥川龍之介全集、有島武郎全集、石川啄木全集、松尾芭蕉全集、夏目漱石全集と佐藤春夫詩集の他、バルザック、ドストエフスキー、フローベル、ジイド、ゲーテ、シラー、トルストイと第一書房発行の近代劇全集がある。さらにアメルのフラグメンテ、ハイネ、ノヴァーリス、フライリップ、ロマン・ローラン、シェークスピア、オスカール・ワイルド等で一七〇冊である。その後、前尾夫人も亡くなら

れ、「蔵書三」の所在を調べているが、今のところ不明である。(以上、文責、村田)

「蔵書三」リスト

分類上の注意

一、分野別ごとに著者が日本人か外国人かで区別し、アルファベット順に分類した。ただしⅠの分野、経済学全集、近代劇全集は例外とした。

二、各本は原則として著者および編者、訳者、書名、出版元、発行年月の順に表した。

※は洋書、発行年月のM：明治、T：大正、S：昭和である。

三、ある分野に入れた他の分野の本は著者が本来その分野が専門のものとみなし同一分野にまとめた。

分野別蔵書数

Ⅲ		Ⅱ		Ⅰ		
法律学・法理学		哲学・思想		語学・辞書・事典		分野別
外国人	日本人	外国人	日本人	日本人及外国人	和書	洋書
○	五四	一〇	一一	一二	三	一
一	○	九	〇	一五	一五	一
一	五四	一九	一一	一五	三〇	一
五五		三〇		一五	合計	合計

洋書

合 計	VI		V		IV	
	外国人	日本人	外国人	日本人	外国人	日本人
二六六	一〇一	四六	一	五	六	二〇
三七	二三	〇	一	〇	〇	〇
総合計	一二四	四六	二	五	六	二〇
三〇三	一七〇		七			二六

英 語 四

ドイツ語 二五

フランス語 七

ロシア語 一

合 計 三七冊

I 語学・辞書

I Choix, Lectures Fracraises, 三才社、一九二七(S二)、三 仏※

II ЧЕХОВА, А. П., Сочинения Ромыа※

- 三一五 落合文雄編 ロシア語講座 全三冊 白揚社 一九二八 (S三)
 六一一 八杉貞利編 最新ロシア語講座 全六冊 橘書店 一九三二 (S七)、五
 一二 片山正雄 獨逸文法辞典 有明堂 七版 一九二三 (T一二)、一二
 一三 片山正雄 解雙独和大辞典 南江堂 二版 一九二七 (S一二)、八
 一四 Augé, Claude. Neureaude Petit Larousse Illustré, 1926 仏※
 一五 社会思想社編 社会科学大事典 改造社 一九三二 (S七)、五

II a 哲学・思想・心理学、その他 (日本人)

- 一 阿部 次郎 美学 哲学叢書 6 岩波書店 一九一七 (T六)、四
 二 阿部 次郎 人格主義 岩波書店 一九二二 (T一二)、六
 三 金子 大栄 佛教概論 岩波書店 一九一九 (T八)、六
 四 金子 大栄 彼岸の世界 岩波書店 一九二五 (T一四)、九
 五 紀平 正美 無門閑解釈 岩波書店 一九一八 (T七)、一
 六 紀平 正美 行の哲学 岩波書店 一九二三 (T一二)、一
 七 桑木 巖翼 カント雑考 岩波書店 一九二四 (T一三)、一一
 八 松本亦太郎 心理学講話 改造社 一九二三 (T一二)、七
 九 西田幾多郎 芸術と道德 岩波書店 一九二三 (T一二)、七

- 一〇 西田幾多郎 一般者の自覚的体系 岩波書店 一九三〇(S五)、一
 一一 西田幾多郎 無の自覚的限定 岩波書店 一九三二(S七)、一二

II b 哲学・思想 (外国人)

- 一 デイルタイ、江沢譲爾訳 文芸復興と宗教改革 春陽堂 一九三一(S六)、六
 二 フォイエルバッハ、関根悦郎・国互一訳 唯心論と唯物論 フォイエルバッハ著作集 共生閣 一九三一(S六)、一一
 三 ヘーゲル、国際ヘーゲル聯盟編 ヘーゲル哲学解説 岩波書店 一九三一(S六)、一一
 四 メーリング、米田幸雄訳 獨逸社会民主党史(二) 第二期世界大思想全集 第一七卷 春秋社 一九三一(S六)、七
 五 メーリング、塚本三吉訳 獨逸社会民主党史(四) 第二期世界大思想全集 第二〇卷 春秋社 一九三一(S六)、九
 六 ミーチン監修、コムアカデミア哲学研究所、広島定吉訳 弁証法的唯物論 全 ナウカ社 一九三四(S九)、一〇
 七 ニーチェ、生田長江訳 ツアラトウストラ 全 ニーチェ全集五 新潮社 一九二一(T一〇)、一一
 八 Pascal, Blaise, Pensées de Pascal. 仏※
 九 リッカート、佐竹哲雄訳 文化科学と自然科学 大村書店 一九二二(T二二)、四
 一〇 ローゼンクランツ、和田治平訳 ヘーゲル哲学体系解説 白揚社 一九三一(S六)、一二
 一一 Rousseau, J.J. Les Confessions I 仏※
 一二 Schelling, F.W.J. Shellings Werke 1.2.3.4.5.6. Philipp Reclam 独※
 一八 Spinoza, Spinoza's Ethics and "De intellectus Emendatione," tr. by A.Boyle, Everyman's Library. 英※

一九 ヴィンデルバント 出隆・田中美知太郎訳 プラトン 大村書店 一九二四(T二三)、九

Ⅲ a 法律学・法理学 (日本人)

- 一 鳩山 秀夫 注釈民法全書 第二卷 法律行為乃至時効、合本 巖松堂 第一冊 一九二二(M四五)、一、第二冊 一九二〇(T九)、二
- 二 鳩山 秀夫 日本民法総論 上 岩波書店 一九二三(T二)、一〇
- 三 鳩山 秀夫 日本民法総論 下 岩波書店 一九二四(T一三)、一一
- 四 鳩山 秀夫 日本債権法 総論 増訂版 岩波書店 一九二五(T一四)、九
- 五 鳩山 秀夫 日本債権法各論 下 岩波書店 一九二四(T一三)、四
- 六 鳩山 秀夫 民法研究 第三卷債権総論 岩波書店 一九二六(T一五)、
- 七 菱谷 精吾 不法行為論 清水書店 一九〇五(M三八)、三
- 八 穂積 重遠 民法総論 上 二二版 有斐閣 一九二七(S二)、二
- 九 穂積 重遠 民法総論 下 一八版 有斐閣 一九二六(T一五)、一〇
- 一〇 市村 光恵 帝国憲法論 全 有斐閣 一九二五(T四)、一一
- 一一 粟生 武夫 一法学者の嘆息 弘文堂 一九三六(S一)、一〇
- 一二 京大訣別記念法学論文集 政経書院 一九三三(S八)、一二
- 一三 牧野 英一 刑法研究 第二 有斐閣 一九二一(T一〇)、一一

- 一四 牧野 英一 刑法研究 第三 有斐閣 一九二七 (S二)、九
 一五 牧野 英一 刑法における重点の変遷 有斐閣 一九二九 (S四)、六
 一六 牧野菊之助 日本親族法論 巖松堂 一九〇八 (M四一)、九
 一七 松本 丞治 商行為法 中央大学 一九一四 (T三)、七
 一八 松本 丞治 海商法 中央大学 一九一四 (T三)、八
 一九 松本 丞治 保険法 中央大学 一九一五 (T四)、九
 二〇 松本 丞治 会社法講義 巖松堂 一九一六 (T五)、一一
 二一 松本 丞治 手形法 中央大学 一九一八 (T七)、五
 二二 松本 丞治 商法総論 中央大学 一九二三 (T一二)、五
 二三 美濃部達吉 憲法撮要 全 有斐閣 一九二三 (T一二)、四
 二四 美濃部達吉 行政法撮要 全 有斐閣 一九二四 (T一三)、
 二五 美濃部達吉 行政法撮要 上 有斐閣 一九二四 (T一三)、六
 二六 三猪信三 担保物権法 有斐閣 一九一五 (T四)、一〇
 二七 三猪信三 近世法学通論 有斐閣 一九一八 (T七)、九
 二八 泉二新熊 日本刑法論 上 総論 有斐閣 一九〇八 (M四一)、六
 二九 中島玉吉 民法釈義 卷之三 債権総論 上 金刺芳流堂 一九二二 (T一〇)、三
 三〇 中島玉吉 親族相続法改造論 大鏡閣蔵 一九二七 (S二)、九

- 三一 中村進午 国際公法論 清水書店 一九一六(T五)
- 三二 大石義雄 公法統治原理 日本評論社 一九三七(S一二)、六
- 三三 岡松參太郎 法律行為 全 京都法学会 一九一四(T三)、三
- 三四 立命館大学 法と経済 第二卷 一九三四(S九)七、一二
- 三五 斎藤常三郎 破産法大綱 弘文堂 一九二七(S二)、四
- 三六 佐々 穆 社会学の發達と主張 弘文堂書房 一九二七(S二)、一一
- 三七 佐々木惣一 日本行政法 総論 有斐閣 一九二四(T一三)、九
- 三八 佐々木惣一他編 京大事件 岩波書店 一九三三(S八)、一一
- 三九 末弘巖太郎 農村法律問題 改造社 一九二四(T一三)、一一
- 四〇 末弘巖太郎 民法講話 上 岩波書店 一九二六(T一五)、六
- 四一 末弘巖太郎 民法講話 下 岩波書店 一九二七(S二)、九
- 四二 末川 博 民法に於ける特殊問題の研究 第一卷 弘文堂 一九二五(T一四)、五
- 四三 末川 博 不正行為並に權利濫用の研究 岩波書店 一九三三(S八)、四
- 四四 高柳賢三 新法学の基調 岩波書店 一九二三(T一二)、一一
- 四五 竹田 省 商法総論 全 有斐閣 一九一二(T一)、一〇
- 四六 瀧川幸辰 刑法雜筆 文友堂書店 一九三七(S一二)、五
- 四七 田中耕太郎 商法総論概要 有斐閣 一九二五(T一四)、一

- 四八 田中耕太郎 会社法概論 岩波書店 一九二六 (T一五)、一一
 四九 富井政章 民法原理第二卷 物権 有斐閣 一九〇六 (M三九)、九
 五〇 恒藤 恭 社会と意志 内外出版株式会社 一九二四 (T一三)、二
 五一 恒藤 恭 法律の生命 岩波書店 一九二七 (S二)、五
 五二 恒藤 恭 価値と文化現象 弘文堂 一九二七 (S二)、六
 五三 恒藤 恭 法の基本問題 岩波書店 一九三六 (S一一)、一〇
 五四 恒藤 恭 法的人格者の理論 弘文堂 一九三六 (S一一)、一一

III b 法学 (外国人)

- 一 Tuhr, Andreas von. Bürgerliches Recht, Allgemeiner Teil. 独※

IV a 経済学 (日本人)

- 一 土方成美 国民経済読本 日本評論社 一九三四 (S九)、五
 二 向坂逸郎・赤松克麿・河野密・矢次一夫・田中勝太郎・篠村敏・佐々弘雄
 ファシズム研究 改造社 一九三二 (S七)、七
 三一二〇 経済学全集 一八冊 改造社
 三 第一卷 経済学大綱 河上肇 一九二八 (S三)、一〇

- 四 第五卷 経済学基礎理論 (中山伊知郎 数理経済学方法論、高垣寅次郎 経済理論の心理学基礎、高田保馬 経済学方法論) 一九三二(S七)、三
- 五 第七卷 経済学特殊理論 下 (田中金司 貨幣論・銀行論、坂西由蔵企業理論、小島精一 独占・カルテル・トラスト、藤井萬三郎 人口理論) 一九二九(S四)、一二
- 六 第九卷 経済哲学(杉村広蔵 文化価値主義の経済哲学、二木保幾 経済学に於る若干の哲学的問題、二木保幾 左田博士の経済哲学に対する解説及び批判) 一九三三(S八)、一
- 七 第一一卷 資本論体系 中 (宇野弘蔵 資本の変態とその循環、宇野弘蔵 資本の回転、山田盛太郎 再生産過程表式分析序論) 一九三一(S六)、九
- 八 第二二卷 資本論体系 下 向坂逸郎 一九三一(S六)、三
- 九 第一五卷 経済政策 上 (河津暹 経済政策概論、氣賀勘 重工業政策、八木沢善次 農業政策) 一九三一(S六)、四
- 一〇 第一六卷 経済政策 下 (竹内謙二 商業政策、小島島太郎 交通概論、高島佐一郎 金融政策、社会経済研究所 サヴェート経済政策の回顧と展望) 一九三〇(S五)、三
- 一一 第一八卷 社会政策 (波多野鼎 社会政策原理、波多野鼎 社会政策施設論、山村喬 消費組合論、山川均 労働組合、田中九一 ザヴェート聯邦の「社会政策」) 一九二九(S四)、一一
- 一二 第二六卷 マルクス経済学説の発展 上 (河西太一郎 農業理論の発展、猪俣津南雄 金融資本と帝国主義、向坂逸郎 人口理論) 一九二九(S四)、六

- 一三 第二七卷 マルクス経済学説の發展下（山川均・檜六郎 転形期の経済、林要 独塊におけるマルクス経済理論の發展、小林良正 ロシアにおけるマルクス経済理論の發展、伊藤好道 フランスにおけるマルキシズムとその運動、伊藤好道 イギリスにおけるマルキシズムとその運動） 一九三一（S六）、一〇
- 一四 第四三卷 産業・合理化 有沢広己・阿部勇 一九三〇（S五）、六
- 一五 第四五卷 経済法令集 田中耕太郎 一九三一（S六）、七
- 一六 第四七卷 上 カルテル・トラスト・コンツェルン 上 世界部 有沢広己 一九三一（S六）、七
- 一七 第四七卷 下 カルテル・トラスト・コンツェルン 下 日本部 美濃部亮吉 一九三一（S六）、八
- 一八 第四八卷 唯物史観 大森義太郎 一九三二（S七）、一二
- 一九 第五〇卷 剰余価値学説略史 森戸辰男・笠信太郎、一九三三（S八）、七
- 二〇 第六〇卷 世界経済学 作田莊一 一九三三（S八）、四

IV b 経済学（外国人）

- 一 ブルガコフ、島野三郎訳 経済哲学 改造社 一九二八（S三）、七
- 二 レーニン、山川均訳 レーニン著作集 第一卷 新経済政策 レーニン著作刊行会 一九二六（T二五）、三
- 三―六 マーシャル、A 大塚金之助訳 経済学原理 全四冊 改造社 一九二八（S三）、

V a 文学・芸術（日本人）

- 一 土居光知 文学序説 岩波書店 一九二七（S二）、二
- 二 生田長江・野上白川・昇曙夢・森田草平 近代文芸十二講 新潮社 一九二二（T一〇）、八
- 三 成瀬無極 疾風怒濤時代と現代獨逸文学 改造社 一九二九（S四）、一二
- 四 鼓 常良 西洋美学史 大村書店 一九二六（T一五）、一
- 五 植田壽藏 芸術哲学 改造社 一九二四（T一三）、一一

V b 文学・芸術（外国人）

- 一 Simmel, Georg, Renbrandt, Ein Kunstphilosophischer Versuch, 2. Aufl. 1919 独※
- 二 ジンメル, G 小田秀人訳 ゲーテ 大村書店 一九二四（T一三）、一

VI a 文学作品（小説・詩・戯曲 他）（日本人）

- 一〇一 芥川龍之助全集 第一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇卷 一〇冊 岩波書店
一九三四（S九）、一九三五（S一〇）、
- 一〇二 有島武郎全集 第一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇卷 一〇冊 新潮社
- 一〇三 石川啄木全集 第一、二、三、四、五卷 五冊 改造社 一九二八（S三）、一一—一九二九（S四）、三
- 一〇四 松尾芭蕉 俳聖芭蕉全集 勝峰晋風・吉木榮郎共関 聚英閣 一九二四（T一三）、五

二七—四五 夏目漱石全集 第一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、

一八、一九卷 一九冊 岩波書店 一九三五(S一〇)、一九三七(S一二)。

四六 佐藤春夫 佐藤春夫詩集 第一書房 一九二六(T一五)、三

VI b 文学作品(小説・詩・戯曲 他)(外国人)

一—二 Amiel, Henri-Frédéric, Fragments d'un journal intime, 1. 2. publié per E. Scherer, 1883-84 仏※

三 バルザック、太宰施門・丸山利馬・森本文雄・宮本正清訳 バルザック全集 第三卷 幻滅上 河出書房

一九三五(S一〇)、六

四—二二 ドストエフスキー全集 第一、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一五、一六、一七、

一八、二〇、二一、二二、三笠書房 一九三五(S一〇)、一一

二三 Eckermann, Johann Peter, Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens, Leipzig/Hesse & Becker Verlag. 独※

二四 Eichendorff, J. F., Aus den Leben eines Taugenichts, Philipp Leclam 1826 独※

二五—二七 フローベル全集 全三卷 改造社

二八—三二 ジイド全集 第八、九、一〇、一一、一二卷 五冊 建設社 一九三四(S九)、一

三三 Goethe, J. W., Gedichte, philipp Reclam. 独※

三四 Goethe, J. W., Die Leiden des jungen Werther, 1922. 独※

三五—五四 ゲーテ全集 一、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二三、二

- 四、二六、二九、三〇、三一卷 二〇冊 改造社 一九三五(S一〇)―一九三七(S一二)
- 五五 グウルモン 堀口大学訳 グウルモン詩抄 第一書房 一九二八(S三)′一二
- 五六、五七 Heine, H., Heinrich Heines sämtliche Werke 1.2 Philipp Leclan, 1921 独※
- 五八 Kluge, Herman, Auswahl deutscher Gedichte, 1927 独※
- 五九 Novais, Heinrich von Oferdingen, 三浦吉衛編 郁文堂書店 一九二六(T一五)′一〇 独※
- 六〇 フイリップ フイリップ短編集 第一書房 一九二八(S三)′四
- 六一 Rolland, Romain, Le Jeu de l'amour et la mort, Albin Michel Editeur, 1925 仏※
- 六二 Schiller, J.C.F., Gestalt und Gedanke, Albert Langen Verlag. 独※
- 六三 Schiller, J.C.F., Wilhelm Tell, Schauspiel in fünf Auszügen. Philipp Reclam. 独※
- 六四 Schiller, J.C.F., Schillers Briefe. 1925 独※
- 六五―七〇 Schillers Werke, 1 Dramatisch dichtungen Band 1, 2 Dramatische dichtungen Band 2, 3 Schillers
Gedichte und Erzählungen, 4 Schillers Philosophische Schriften, 5 Schillers Historisch Schriften, 6
Shillers Uebersetzungen. 独※
- 七一 Shakespeare, W., Romeo and Juliet, Macmillan co-Ltd, 1923 英※
- 七十二 Shakespeare, W., Hamlet, Prince of Denmark Macmillan co-Ltd 1926 英※
- 七三―九三 トルストイ全集 第一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一
七、一九、二〇、二一、二二卷 二二冊 岩波書店 一九二九(S四)′一〇―一九三一(S六)′一〇

九四 Wilde, Oscar, Intentions, Methuen Co Ltd, 1891 英※

- 九五―一二四 近代劇全集―イブセン誕生百年祭記念出版―第一書房 一、二、三(北歐)、七、八、九、一〇、一一、一二、一三(独逸)、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二二、二三、二四(佛蘭西)、二五(愛蘭土)、二七、二八、二九、三〇、三二、三三(露西亜)、三五(南欧)、三八(中欧)、四〇、四一(英吉利)、三〇冊
一九二七(S二)―

(二) 沼田稻次郎さんから伺ったお話

『諸問題』も次第に入手困難になった一九六四年、「世界文化」誌上に発表された論文二点を新たに加えて、恒藤恭・沼田稻次郎編『近代法の基礎構造』が日本評論社から出版された。沼田さんが「はしがき」で述べられている様に再版の企画は既に一九四九年頃より始められていた様である。そこに記されているが宮内さんが作成に協力した業績リストが『構造』巻末に掲載されている。我々の作成した『断面』の巻末所収のリスト―これは村田が作成したもので、学生新聞その他に掲載された文章も含んでいるので、より包括的である―とは、一部、公表された時期に関して違いがあるが、ほぼ充分なものになっている。尚、この間における沼田さんと恒藤さんとの連絡の一端を示す書状も残っている。

周知の様に沼田さんは、『構造』を編集しただけではなく加古さんの業績を継承され発展させた人であり、

恒藤さんが「加古君の学者としての全貌をつたえる、すぐれた述作」(『構造』三三三頁)と推奨された論文「加古祐二郎の法哲学」(『構造』所収)を含めて多くの加古さんの法理論に関する論述がある。そこでお話を聞くべく長野県蓼科の別荘を訪問した。以下は一九八八年八月二二日、その際に伺ったお話の要約である。質問者は藤田勇さん、名和田是彦さん、村田、大橋であるが、ここに記述した内容は、大橋が独自に纏め且つ補足したものである。文中⑤内は当日、沼田さんから聞いた内容を示す。

京大事件(「滝川事件」とも言う)後、一九三四年(昭和九)に京大法学部に入學された沼田さんは、「法哲学研究会」(或いは「法理学研究会」?沼田「滝川事件後の法哲学研究会等についての覚書」、二六会編「滝川事件以後の京大の学生運動」第一集所収、西田書店、一九八八年、一一〇頁註3参照。以下「覚書」と略す。尚この研究会は学生の研究会であつて、恒藤さんを囲む研究者達の「関西法理学研究会」とは異なる)に加入する。森 義宣さんも会員であり、事件後立命館大学の大学院に入學された吉富重夫さんや淵 定さんも常連として出席されていた様である。その年の夏休み前に研究会での報告を担当する。その時、恒藤さんや加古さん等に初めて顔を合わせた。恒藤さん・加古さんが出席されたのはこの時だけであつた様である(「覚書」一〇三頁)。⑥テーマを「犯罪と刑罰」とした。ベツカリアの死刑廃止論に関心があつたので、社会契約の中に死刑まで認めうるかと言う事を問題にした。この頃、自然法論に興味があつた。即ち歴史通底的な自然法的なものがあり、それがそれぞれの歴史時代で特殊な形態を取ると考えていた。恒藤さんの著書特に『批判的法律哲学の研究』等を準備の為に読んでいたので、Stammlerの「内容可変の自然法」に影響されてその様に考えたのだと思う。論理的なものとの歴史的なものとの関係が未だに明瞭でなかつた。これに対し

て加古さんから「具体的普遍即ち特殊的なもの」と普遍的なものとの統一したものが現実的である」との批判を受けた。思うに、昭和八年の『訣別論文集』所収の論文及び昭和九年の法秩序の歴史的構造を扱った論文を書かれた時期で、加古さんの主要な関心は具体的普遍としての近代法に向けられていた。パシュカーニス批判もそこで扱われている。沼田さんはこの批判を契機にパシュカーニスを読み始め、ヘーゲルの再読に向かった。今から考えても当時の理論水準から見て、加古さんの視点は優れていたと思う。『前衛』一九七五年五月号、「私と読書」欄に沼田さんは「加古祐二郎先生のこと―唯物史観法学へのみちびき―」を書かれており、この時の様子をもう少し詳しく述べられている。一六六頁

《その後、加古さんの書かれたものは全て読んだから、当時の学生の中で一番よく読んだ者の中に入るであろう。昭和一一年に『学生評論』が創刊された時、その第一号と二号に沼田さんは「法解釈の客観性」を「田井俊一」の名で発表した（長谷川正安・藤田勇編『文献研究マルクス主義法学―戦前―』日本評論社、一九七二年に収録）。

《加古さんがこの論文を評価しているとの話を聞き、加古さんのお宅を訪問したのが、親しくお話をした最初であった。それは加古さんの入院前で、書斎（レーニンの像のかかった書斎）と前記『前衛』一六七頁では表現されている。ついでに言えば、『前衛』同年七月号の「私と読書」欄の、俳優の永井智雄さんの「敬愛する学者たち」によれば、永井さんは甲南高校で加古さんの講義を聴き、又「加古先生のレーニンの像のかかった書斎を、ぼくも沼田稲次郎さんともになつかしく思い出す」（二二六頁と述べられている）で、二、三時間話した。様々な話を話したので何を話したか忘れた。二度目に行ったのは、もう入院してからで、

加古さんと学問やその他の事で話をする状況にはなく、そして、その次は昭和一二年の七月、夏休みで田舎に帰って居た時に、淵さんから「亡くなった」との電報を貰って駆けつけた。その意味では、加古さんとの繋がりは、現在生存している人の中では、石本雅男さんを除いて自分が一番深いであろうか。森 義宣さんも居られるか。亡くなった人では吉富さん、淵さん」。

従って、沼田さんが加古さんと学問その他につき話をされた機会は、最初の約三時間程度になろうか。沼田さんは「正直に言って、私は当時は日本の法イデオロギーを直接に批判してもらいたいと思っていた。座談の間では、しばしば日本の政治や学者の批判もやっていたのを記憶する」(『構造』三二七頁)と記述されているが、それは多分、その機会であつたらう。尚《加古さんは大学に残った人の中で、佐伯千仞さんを最も評価されていた》との事である(『百年史紀要』No.五に佐伯さんのヒアリングが収録されている。佐伯さんが立命館に移った若い人達を代表して、en blockでの復帰に努力された事が判る。そして講師・副手の身分が助教授・助手と異なる事情もあつて苦労された様であるが、大岩さんは助教授であつても復帰組とならぬ進行状況に、京大サイドの「選択的意図」の強さを推測しうる。加古さんの「日記」の中断に、復帰問題の与えたそのショックの大きさを感ずる―『断面』二四五頁)。京大事件について沼田さんは次のような意見を述べられた《事件で退職された七教授の中には、確信的な、即ち文部省に対して敗れるであろうが、正しいが故に実行すると言った恒藤・田村教授、我々がここまで戦えば相手は折れるであろうと樂觀的に考えた佐々木・末川教授、この機会に大学を辞める考えの宮本英雄教授との分け方が可能である。宮本英雄教授はよく考えた人で滝川さんとは違う》と。最後の部分はよく理解出来なかつたが、その他は興味ある分析と思

われた。尤も沼田さんは「覚書」で、日本全体の歴史的な流れの中で京大事件の占める客観的な歴史的な位置、学問の自由を守る歴史的戦いの客観的意義と、事件の渦中にあつた教授達の京大去就をめぐる人間像・その評価とを混同すべきでないとして戒めておられる（一〇八頁）。

山之内一郎さんによれば「晩年の加古さんは宗教に傾斜する印象があつた」との質問に対し（前記『社会科学研究』七卷二・三・四合併号二一六頁参照）、《宗教は判らぬが西田哲学ではないか》と答えられた。只、沼田さんも引用されている「迷える羊」を探し求めたキリストの心の深さを想う。だが・・・」（『構造』三七頁）との文章も示す様に、衰えゆく体力に加え、加古さんの繊細な神経は、ますます凶暴化する抑圧、見通しの暗い近未来の現実の圧力に、しばしば挫けそうになりながら、氣力を奮つて姿勢を立て直す事の繰り返しであつたから、時には孤独のなかで「自殺」を考え自己嫌悪に震える状況もあり（『断面』二五一頁以下）、宗教書を開かれる事もあつたろうと思われる。

加古理論については《論文は何度も読んだから、今となつては少々読むのにくたびれる。マルクス主義は歴史的な法則性と、主体性の関係をもつと考えるべきである。加古さんはそれを考えたと思う。しかし、歴史的現実的社会としての日本が、それを語る状況に無かつた。さらに、「主体性」を強調されるが、時代の制約を考慮に入れても余り迫力がない。総じて「観照的」であり、仮に健康であつたとしても実践活動に加わる事は無かつたのでなからうか。「主体的」の強調も、正しく捉えているが、もし本当に主体的であればイデオロギー批判に終わると思われぬ。『世界文化』に発表された最後の論文「法律学における政治的性格」でも、歴史的限界性ばかりを自由法論や純粹法学について述べている。これらの理論に積極的なものは存す

るかの視点、主体的運動がどうであろうとも駄目な側面と、それにも拘わらず量的発展の面を持つ意義がどうかとの言及が無い。その点では若いと思う」と。尤も、これは一九八八年に於ける沼田さんの感想であり、それ以前の論文では、いまだし積極的な側面を指摘されている。例えば『構造』三二六―七頁では、加古さんは「もろもろの法思想をその源に遡って批判を加えたと同時に、オリジナルな思想には、たとえ観念論哲学であっても生かすものは生かさうとした」。又「加古先生の風格と法思想」(『法学セミナー』一九六五年一月号所収)以下「風格」と略する(一六頁)では、現在生存されて居られたら、おそらく法の「限界性」の問題よりも寧ろ、より多くの歴史的主体に働きかけながら、どう現実を改善しつつ、ロードスを越える為の飛躍的实践ないしは革命に媒介せしむべきかと言う、大きな戦略的視点に立って論じられたのではあるまいかとさえ想像されている。

このマルクス主義法学の果たすべき課題については、戦前からの「ブルジョア・イデオロギー批判」の継承の側面が、六〇年代には沼田さんの改良主義批判に現れるが、しかし既に加古さんに於いても語られている「イデオロギーの真理性」即ち、意識が存在に規定される面では、正に意識・観念は虚偽意識としてのイデオロギーの側面を帯びつつ、他方、歴史的实践的主体による「優れて歴史的な観点」―歴史的运动の進展に寄与する所の―に立脚した「真理性Ⅱ論理性」を具備したイデオロギーの存立しうる事(『構造』二一―四頁の「実践的模写」)の指摘は重要であり、そして沼田さんもそれを認めて(『構造』三二六―七頁)、「マルクス主義法学」の積極的課題として受け止められたものと思われる。繰り返しになるが、戦前の加古さんを取り巻く状況では、現実を隠蔽し、或いは美化するイデオロギーとの闘争が主たる作業とならざるをえなかつ

た。しかし歴史状況が変われば、「イデオロギーの真理性」モメントの具体的展開が可能となりうる。それは単純に、今日饒舌的に語られる所の、平板で国際政治の道具として操作される様な「人権」「民主主義」等と等置出来ないにしても、否、等置すべきでない故に、これらのイデオロギーの虚偽性と真理性の吟味が、歴史的主体の実践を媒介として論じられる必要がある。この日のヒアリングにおいても、社会法の捉え方として、沼田さんは《戦後は法曹社会主義的側面を取り入れる必要があった》と語られていたが、沼田さんの晩年の「人権」「民主主義」「人間の尊厳」の強調は、その意味で加古さんの「イデオロギーの真理性」「実践的模写」の継承であり発展であると考えられる（尚、藤田勇「沼田法学における唯物史観をめぐって」『法の科学』二七号、一九九八年、一五〇頁以下参照）。それにしても、弁証法を恣意的に利用し、又、歴史的諸経験の昇華としての様々の哲学・社会思想を無造作に「ブルジョア・イデオロギー」として否定し、ホップスやモンテスキューウ以来の歴史的英知である「権力の悪魔的肥大化」に対して、人々を無防備にしたいわゆる「スターリン主義」の及ぼした影響を、己れの反省を含めて、深く検討する必要を、大橋は、この日の議論を通じて痛感した。

最後に加古さんがしばしば用いる、「存在論的」と言う表現の意味につき沼田さんの解釈を求めた。この問題は我々の間でも、又、田中茂樹さん（「加古祐二郎における存在論的弁証法と法システム」『法哲学年報—日本の法哲学—』所収、一九七九年、三九頁以下、有斐閣）や森 英樹さん（「加古祐二郎」、潮見・利谷編『日本の法学者』所収、一九七五年、四〇三頁以下、日本評論社）の間でも理解のずれの生ずる原因の一つとなっている。尤も、この問題を含めて、加古法理論とマルクス主義法学との関連についての評価の「ずれ」

は論者の抱く「マルクス主義」の捉え方に因る所が多分にある点にも留意しておく必要がある。沼田さんは、すでにヒアリングが長時間になり疲れられた事もあってか、「加古さんの実践的存在論的弁証法は、唯物弁証法と同じつもりで書かれている。そこ迄表現を遠慮せねばならなかったかどうか」と疑問を述べられた。沼田さんによれば、「西田哲学や田辺哲学の影響、その他種々の思想を部分的に取り入れられている。西田哲学からストレートにマルクス主義は出てこないが、社会的関心に転換する時にマルクスのものであると読むと、マルクス主義者になるのではないか。しかし当時、哲学的マルクス主義者には三木清や戸坂潤の影響が強い。加古さんの理論水準を高めたのは三木・戸坂であり田辺であろう。しかし唯物史観的影響は田辺ではなく三木・戸坂であった」と。既に『風格』三頁では、「加古法理学を理解する上に、彼の存在概念、したがって『存在論的』とする規定性を捉えておく」事の必要性が次の様に述べられている。即ち三木やハイデッガーの「存在論的なものの考え方にはかなり親しんでいられたのは否定しないが、しかしながら、先生は存在という言葉によって、矛盾を内在する現実存在、運動する歴史的・社会的現実存在を考えられていた。つまり、歴史的社會がまさに先生において、すぐれて存在するものであった。・現実存在は・他人の主観的願望やさまざまな観念的構想によつては、どうにもならない彼岸的なものでありながら、歴史的主体の社会的実践を媒介として勝れて現実的なものだといつてよい」と、結論的には同義の内容を述べられている（更に『構造』三三七頁参照）。只、大橋には唯物弁証法とほぼ等置しうると思ひながら、若干のニュアンスの違いを未だに捨て切れない。田中茂樹さんの理解に親近性を感じるが、尚そこ迄は主張するものではない。村田は田中さん以上に存在論的と唯物弁証法の違いにこだわっている。（森英樹さんは「加古祐二郎は、マルクスから出発

したマルクス主義者ではなく、マルクス主義の源泉—その一つであるドイツ哲学—から出発し、マルクスを
 追体験したマルクス主義者であったといえよう」と指摘する（上掲書四二五頁）。まさにその通りであろう。
 しかし、大多数のマルクス主義者が多少とも加古さんの様な道を辿るのであり、且つマルクス主義者となっ
 てからも、競合する諸理論や強力な批判との格闘で、ずり落ち又這い上がる事の繰り返しを経験するのでは
 なかるうか。このような課程のなかでマルクス理解の伸縮差が必然的に生み出されて来るものと大橋は考え
 ている）

以上を含めて加古理論を評価すれば《当時、日本のマルクス主義者の中には、法の形態性についての考え
 はなかった。東京の人はパシユカーニスを読む人は余りなかった。法の本質論では平野義太郎さんより加古
 さんの方がより突っ込んだ議論をしている。特に法・国家の相対的独自性に注目して、中部構造と言う位置
 付けを行った点で。只、当時では当然の事ながら、「法の働きかけ」と言う側面がない。従って「限界性」が
 全面に出る。今一つ、国際法が眼中にない。日本が国際連盟から脱退する時代の制約とはいえ、欠陥である
 う。とはいえ、繰り返しになるが総括的に言って、時代的制約の中では、最も勝れた仕事であった》と沼田
 さんは語られた。

（以上、文責は大橋）

(三) 梯明秀さんのお話

一九七二年五月二六日に立命館大学衣笠校舎にある梯さんの研究室でお話しを聞かせていただきました。梯さんは一九〇二（明治三五）年徳島県板野郡撫養町（現鳴門市）生まれ、加古さんより三つ年上で、共に立命館大学とは縁が深い。加古さんは第二次大戦前、京都大学滝川事件で辞職した直後三三年から亡くなる三七年まで、梯さんは対戦後、四六年から一年間と五〇年から八一年まで教職についている。

——で始まる文は村田の質問で、その後の「カギカッコ」で始まる文が梯さんの話である。ただし私の判断で繰り返し返しの部分は省略し、さらに明らかに間違いであるところは訂正して読みやすいよう整理した。括弧内は村田の注である。

一、梯さんと加古さんとの出会い

—— 梯先生が加古さんとおつきあいになったのはいつ頃からですか。

「ぼくが京都帝大を卒業してすぐ大阪相愛女子専門学校に行つて（一九二八・昭和三年四月）、翌年現在の近畿大学の前身の「大阪日本大学専門学校」へ勤めて、そこへ加古君の兄の加古哲太郎という人がきておつて、その人は大阪の布施やから、大阪に出て、まあよかろうと一緒に飲みに行こうといつてね。大阪のつきあいは兄さんの方なんですよ。それで、ほうほうへよく引っぱつて行かれて、あん時のカフェーやな、いわゆる。だから酒の仲間という兄さんの方や。」

おそらく淵定君とか吉富重夫君の後で加古君がぼくのとこへ来たんやな。その時は滝川事件が昭和八（一九三三）年やからね。昭和七年は「唯物論研究会」が一〇月に発足したしね。京都ではぼくの家が中心だったしね。そしてはつきりした印象は東京に「唯物論研究会」ができ、それで対抗する意味やないけど京都にもそういう要するに、法学、経済学、哲学が相互に交流する会が必要やと。東京の「唯研」も唯物論に関心のある人というふれこみで、唯物論者じゃなくても入っておった。だんだんと唯物論者だけになって最後に弾圧を受ける時にはもう公式主義が支配するというようになったんだけどね。

その昭和七年に京都には「哲学・科学の会」というやつが、僕と船山信一君とそれに同志社の今総長になっている住谷悦治氏と三人が発起人になって、毎月一回誰かが発表して後でディスカッションをやる。その時の協力者の一人として加古君が入っておった。その前はぼくは昭和三年に大学を出て、それで二年ほど大阪におった。加古君は「哲学・科学の会」にまあ発起人じゃないけど、協力者として、ずーとつき合っておって、そいつが「唯研」の成立年と同じで昭和七年の十二月からずっと翌年昭和八年の六月頃まで。その時に同志社の三羽鳥というか、林要、長谷部文雄、住谷そういう連中がずーと入っとるしね。恒藤先生もずーといちばん熱心に最後まで。そんな時にはもう加古君は京大の講師になっとった。」

—— 加古さんは『世界文化』に二回文章を載せていますが、『世界文化』とはどういう関係があったのですか。

「これは『世界文化』に協力したんで、同人じゃない。あの時には、ぼくも『世界文化』の会員とはちがう。あとで人民戦線事件で引っぱられて、同じように処分されたんだけど。『世界文化』の連中と親しいんだ。

そこが東京と京都のちがいでね。普段対立して行き来しないというんじゃないで、同人みたいなもんなんだ。対立するんじゃないで、協力する。東京やったらすぐに政治的なものが入ってきて、「プロ科」と「唯研」ちゃうことで「プロ科」は共産党が主や。東京でもっと幅広くやるというのは、戸坂潤の性格がね、プロ科と別に唯物論研究と。初めは学会のプログレッシブな人は入っておった。自然科学者もね。その当時でも政治的だということが問題になる前にやめていく人がおったわけや。唯物論の人は残る。

「哲学・科学の会」が京都で開いた時が初対面やなくて、その前に接触があったと思うな。おそらく西田先生とか田辺先生の講義を聞いたあとで一緒になると、加藤正君といつでも後で紅茶を飲みながら、パン屋があるんだが、そこへ行って、今日はひどいこと田辺さんいうたな、というようなことを加藤は言うて、そいつを話したりして、一、二時間ぐらいだべって、そしてそのパンがうまいんで、みやげもので家に持って帰るといふ。いろいろ集まるんで偶然一緒になったといふことは全然ないとはいえないけど、印象に残っていることはないな。

ぼくの『社会の起源』を買った時に吉富とか加古とか死んだ淵君らが、ぼくが貧乏暮らししとったから、あんたを援助する意味で買うんだといつて『社会の起源』を買ってくれた。ぼくは献本してないと思うがな。女房の記憶によると淵君と加古君と一緒に来たよ。

確実なことは、さきほどいった唯研が東京で成立すると同時に京都では「哲学・科学の会」、それぞれの専門領域の知識を交流しようやないかという趣意書で、事前運動何もせんかったのにたくさん集まってね。田辺先生も一番先に来て、それから法学部、経済学部の少壮の末川とか滝川、そういう連中も来るし、おれは

まだひよこや、大学出て一、二年の後でね。一番最初に住谷氏で、次に田辺さんが唯物論者に弁証法を教え、てやるというような態度で来とったから、法学部、経済学部の少壮教授連中は、田辺さんに集中して、住谷氏の報告なんかそつちのけになってね。その時に、会場の楽友会館ではたして何人来るだろうと一緒に心配した中に加古がおった。そういう研究会を通じて人間を知ってるということですね。その時に思想内容を交流することはなかった。」

二、弁証法と存在論の違い

—— 加古さんの日記によると、昭和七年一月七日、ヘーゲルをやり始めて二年目になるとありまして、京都大学を卒業した昭和五年頃からヘーゲルをやり始めたということになります。

「マルクスの立場からヘーゲルをみる。唯物論者になって、あるいは近づいて逆にヘーゲルをやる、というんじゃないですか。」

—— 加古さんは「存在論的弁証法」といわれますけど、唯物弁証法と存在論的弁証法という場合とニュアンスの違いはあるんですか。

「そいつは大いにあるだろうと思うな。船山君なんかは唯物論は存在論だと、戦後言い出したからね。戦前においては、三木清さんがハイデッカーの所から、ハイデッカーのオントロジーやな、フッサール、ハイデッカー、それから、そいつを人間学のマルクスの形態というような形で、『新興科学の旗の下に』に東京へ行ってから書き出した。だから三木さん自体が唯物論に近づくというのは京都時代ですよ。その時の三木さ

んの解釈学というやつがオントロギーやな。オントロギーでは唯物論にならないので、ぼくは三木批判をやつて、そして三木さんは唯物論者やないと。その前に服部之総さんが三木さんを批判をしてるんでね。ぼくにとつては、心酔しとつた三木さんから離れるというのでぼく自身の独自の立場がひらかれていくということなのでね。そこが船山君の言うとおりの唯物論が存在論の一種だという立場からすれば、唯物論でいいだろうというので理解できるけど。

新カント派は認識論でね。存在論は認識論とちがった分野だということになるわけなんだ。やっぱり直接三木さんと接触せずしても、三木さんのものは読んでないかな。」

三、法哲学と経済学

—— 加古さんは経済学もよく勉強していたようですが。

「これは、先生の恒藤さんが、経済哲学と法哲学を両方やつとるからね。マルクス主義的に理論法学を展開しようとするとかやはり『資本論』の交換過程の所有、契約からいかないかな、そうすると『資本論』を読んで、あのあたりだったら経済哲学でも法哲学でも同じことだ。出発点はね。問題は肉付けのために色々な本を読むんで、加古君が法学部のこれから将来法哲学を恒藤先生の後を継いで、それを克服してと、彼は若い時にも思つとつただろうからな。

ぼく達の学生の時に、学界ではやったのが、学問の独自性ということだね。それが、自然科学ははつきりしているけど社会科学の法学の原理は何かとか、経済学の原理からの説明とか。リッケルト流に言うとなら

科学に対する文化科学、そしてマルクスが入る限り社会科学、その一部分としての法学、そこへかつての加古君は研究意欲を集中したんじゃないだろうか。」

—— マルクス主義として法理論をやることは経済学をまずやって、それからなんだというところえ方がありましたか。

「それは史的唯物論の公式の上部構造、下部構造と、ぼく達が三木の影響を受ける前に河上肇さんがおつて社会科学研究会をやつて、恒藤先生も協力していた。その指導者じゃなくて、学生は哲学は観念論で唯物論は経済学だというように機械的に分けておつた。哲学をやるうとしない。そこへ三木が帰つてきて、哲学の枠内でも唯物論になり得る、と彼は人間学のマルクスの形態でもいいという道を開いた。

これは昭和の初めの動きで、単に京都だけじゃなくて、学問論をやる時にヴィンデルバンド、リッケルトに頼つておつたやつが唯物論的に唯物論の領域内において法学なら法学の独自性、自立性、そのアウトノミーをたてるのは何であるかというのが問題になるわけよ。加古君はおそらくそこへ焦点を絞つておつた。そして先生である恒藤先生はもうプレハノフを訳しているんですよ。

大正末期か、ぼくは大正十二年大震災、一高を十三年に出てから京都にやつてきた。その時アカデミーで支配的なのは学問論といえバリッケルトや。唯物論が市民権を獲得するということは、京都では三木、戸坂、これも東京へ行ってからそうはつきり決まるんで、京都では暗中模索の時代ですよ。」

四、主体性の問題

—— 加古さんは法の主体は認識される対象と同時に実践主体ということを書かれています。

「ほくは最初は主体的唯物論ではなくて主体と客体の関連を問題にした。だから公式主義とちがうのは、主体性の契機を生かしていることは戦前から貫いているんで、案外加古君はほくの影響下にあるんじゃないか。」

—— 加藤正さんの主体性は。

「これはまた戦後に山田宗睦さんとか竹内良知さんとかが加藤正のことを再評価する。そのこと自体はいんだけれど、そういう連中は党員でない船山とか梯が党派性とか主体性とかいうとる、党員である加藤がいうとらんと、それでそんなことをあげつらうとる。それは加藤君の批判にも評価にもならない。

要するに加藤君のは客観主義と違うんで、あれは入党してるんで、主体性、党派性という必要がないんで、党内において欠けているものが客観性なんだ。だから主体は党の主体性、党派性ということの中において誰がみてももつともだと思わすような普遍性を強調する。加藤君のやるのは普通の客観主義、公式主義とは違うんで、主体性を前提にして、公式主義やソビエトの輸入的な唯物論に対抗してなおかつ、科学性、普遍性、客観性が主体の大事な契機だというように加藤君は問題提起している。党員でないほくたちは、逆に主体性の契機を党派性の立場に立って、党員でなくても党派性は論理的にどういうような構造だといつてもさしつかえないんで、その点で加藤君とほくとは重点の置き所はちがうけれども、加藤君の場合は主体性は解りきつたことで普遍性のある主体性ということを強調している。ほくたちは客観的な科学を媒介する限りにおい

ては客観性がなきやならんけれども、主体性、党派性ということにおいて主客の統一という論理が重要なで、その意味である当時ぼくなんか主体性論争に参加しなかつたけれども、あの時から主体性ということを経前からな。

物質自体が主体的に運動すると、ぼくはレーニンの自己運動というやつを主体的に自己展開するというこゝとで、天体史、自然史、人間社会史と全自然史の三段階に分かれる。そういう主体は認識主観とちがうんで、認識は対象の中にそれが自己運動する主体、それがどう論理的にどのように規定したらいいかというのがずっと続いてるんだ。戦前の『資本論』研究は最後に「人間労働の資本主義的自己疎外」、その前に「労働過程の弁証法」というやつを書いた。そこでは知覚が主体になつとるんやな。それから自然史をやるのをやめて、『社会の起源』を書いて、そのうちに執筆禁止やからね。

戦後引き揚げて来てからやった時には、やっぱり原理的にもどって『資本論』、これは物としての商品が主体、そこに価値形態論だけど、これはもう普通の経済学者が誰もやらんやつをヘーゲルにさかのぼって『資本論』の初版と現行版のちがいは価値形態論で、マルクスはその時にヘーゲルの『大論理学』をもういっぺん読み直して、こういうことはぼくの論文ではつきりしてるな。宇野弘蔵は商品所有者の意思によって交換が行われる、これは観念論で唯物論とちがうんだ。商品自体がバーレンシュプラツハ（商品語）で話し合つて、人間の耳に聞えんような言葉でかわしているということ、商品自体がお互いに主体的に運動している。その商品の所有者が、いや人格的表現が所有者やね。

主体ということは、戦後になってから西田哲学をもういっぺん再読して場所というところまで行ってるん

で、人間を入れたら唯物論の中に主体性が出てくるようなものではなくて、変革的なことを考える人間の置かれた場所、そういう意味でやってただけだ。加古君あたりは、ただしぼくの影響も受けたかどうか解りませんよ。ぼくは自然史まで行ってまた『資本論』に帰るわけやけども、そいつが昭和八年に『物質の哲学的概念』を出して、そして『社会の起源』だ。加古君の『資本論』理解は法の物神性やな。主体性というところを加古君は法哲学の内部でどのように主張しとったかはどうか。自然史と社会史についての統一的な考えを。」

五、自然史と社会史の関係

—— 加古さんはエンゲルスの『自然弁証法』を翻訳出版されてるんですが。

「エンゲルスの『自然弁証法』には主体性はないよ。それまでの自然科学諸領域において研究の成果を総合していくと、だから自然弁証法を体系化したんじゃないよ、エンゲルスのいう量から質へとか対立の統一とか当てはまる例証を自然科学の分野からバイシユピーレン、例証を引っぱってくるというのや。」

ぼくの物質の主体性というのは、レーニンの意識の外にある客観的実在と、そして自己運動する、その自己運動をソビエトの学者は機械的な因果関係を自己運動という、そうじゃなくて目的的に生命を生む方向に天体は動いているという、物質の主体やからね。だからおそらくこの段階においてぼくだってソビエトの影響を受けたんだけど、でミーチンのいうレーニンの段階、それから党派性、主体性をいうとるわけや。そして科学を常に媒介しなけりゃいかんというんで『社会の起源』にしても、それに関連する諸科学の成果をやっ

て、そして対象自体の主體的動きが生命の起源、社会の起源、その前に天体史の主體的な動きと、そういうのはおそらく日本でほくだけやないんか。

それから『ドイツ・イデオロギー』に科学は一つで、それは自然科学と社会科学だという言葉がある。歴史は人間の社会の歴史だけではなく自然にも歴史があると加古君もいうとる。『ドイツ・イデオロギー』の場合には科学ですよ。対象としての自然を研究するか、社会を対象にするかそいつを統一するのが哲学というのが出てくるわけよ。そいつを物質の自己運動というやつで、ぼくは全自然史を天体的段階、生物的な段階、そして人間社会の発展段階と三つに分けてるわけだね。自然史と社会史について加古君がいつてるのは、これはどうもぼくの考えの方が、その時まで二、三の本をかいてるし、おそらくは、この点に関する限り、ぼくが加古君に影響を与えてるんじゃないかな。」

六、西田哲学の影響

—— 加古さんによると、法的な主体を主體的に把握するんだということはどういうふうにしてできるのかというと、歴史的な主体という考え方をして真の歴史実践的な主体は階級的な主体である。それには内在的批判と超越的批判の両方が必要で、それらの両者によって、法の主体というものも主體的に把握できる、そしてそれは超越的な批判を媒介としなければならぬ。それは勿論認識される対象としてあるのではなくて、それを認識する、みずから自覚的に把握していくんだという展開ですが。

「ぼくの主体性というやつは歴史の中に人間を入れるというのではなくてね、人間がその時代を次の時代

への展開せしめるひとつの普遍的意識形態で、現実実在社会の中にイデアルに、これは西田哲学の場所ですよ。しかしそういう主体性を場所まで持つて行ったのは、ぼくの戦後のことで、戦前は場所になるのは労働者の働く知覚が主体だったんで、そいつは西田哲学の無の場所か、無の場所では唯物論としては困るちゅうんでね。そこでごく最近『遊』（創刊号 一九九一年九月）という雑誌でふれてるでしょう。量子力学の素粒子論とちがった量子学のリウウコロスポンリーレンスと呼ぶんだけど、その量子力学の振動子の動き、振動子という実体はないんだけど、そこに三百の素粒子があつてどの粒子が何と結合したから、こういう運動ができたんだという、そういうものを無の場所に結び付ければ、これは科学に媒介されたもんだし、西田哲学の無の場所というやつは観念論じゃなくて唯物論化できるんだということになってくる。これも戦後になつてずっと後や、物理学の入門的な本を読んでから、ずっと後になつてそこへ行くんや。

そういう考え方は案外どうかな、ぼくも西田哲学の影響を受けて超越するという無の場所やね、種々様々な場所があつて西田哲学なるものは。西田さんの影響は受けとりやせんか。西田さんの主体つてやつは歴史を動かすのは個人を乗せる場所だった。だから超越とかいうのは存在論的超越でそこへ歴史を動かす主体と考えるのは、どうもぼくと戦前にそのへんのところ話し合つたことないんだがな、まあ同じような歩みをしたつたとすれば西田さんの影響じゃないかな。

西田さんの講義は解るか解らないのか、まあお祭り騒ぎみたいなもの、学生には解らなかつたよ。まあ同僚の教授達、京大のそれがずらりと一番最後の席で、我々学生が一番前に座つて、円を描いて場所がいくつもあった、何のこつちや解らへんのよ。西田さんの講義は卒業して、三、四年たつてやつと解り出した

よ。講義よう出よったのは西田さんと田辺さんだけで、あとはみんなさぼっとった。

三木、戸坂が東京へ行って、そして左翼のやつこの頃何を考えとるかというて、西田さんはほくを呼び出しよった。西田さんが非常に唯物論に近づいたのは、哲学論文集の第二集や。まあ実践というけれど日本の実践は、ポイエシス、工作するということ、そのへんまでいかんけど。レーニンの弁証法についてなんか読んどるんで、『経・哲手稿』も読んだし、エンゲルのものも読んどって、マルクスに比べてレーニンの方が流動的でね、そいつは俺に似とるといふんでね、西田さんは、エンゲルスのことをエンゲルといつて、エンゲルスといわんのや、軽蔑してね。エンゲルはあかんといいはるしね。」

—— 加古さんの一番初めに書いた、『甲南大学校友会雑誌』に載せた「自覚の過程としての直観及び反省の概念とその諸相」があるんですが、これによると高校の時から西田さんに注目していたようです。

「これは西田哲学そのままや。高等学校の時に、そいつを読んでるんで、だからやっぱり西田さんの影響が強いぜ。」

西田哲学から唯物論への道というのは、ほくもそうだが、加古君も加古君独自の歩みをしようとしよったんじゃないかな。だからほくが加古君に影響を与えたというよりも、源流としての西田哲学を唯物論へ踏み出すのと同時に、批判的摂取しておった。それぞれ独立に西田哲学を唯物論的に活用しようというのが梯及び加古君の頭の中に、それぞれ別々に動いておったところ見るのが正当じゃないですか。たまたまほくがさきに『物質の哲学的概念』と『社会の起源』を書いておったから、そいつを参考にしたかもしれないが、その根本の思想は、もうちよっと深い内容は、西田哲学だな。この論文を高等学校時代でしょう。だから素晴ら

しい秀才だよ。そして唯物論へずっと動いていくんだよ。

そして恒藤先生も亡くなったけど、いまならいうてさしつかえないと思うけど、昭和七年唯物論の何か、淵君、加古君そしてぼくなんかかなり唯物論自体と一緒に勉強するということがあったですよ。ところが彼はいいよ京大の助手になったということから、そういう研究会に顔を出さんようになる。そこでぼくがちょっと口で批判したことがある。そいつが大阪へ行っつていっつもごちそうになる兄貴の哲太郎さん、これは学問に関心ないんだが、弟を批判してるのはなんじゃというて兄さんにぼくは一緒に酒飲みながら足で蹴られたことがある。加古君は兄貴と弟と仲が悪いじゃけど、肉親の弟をこれでも思うとるんじゃちゆうことだね。

京大の法学部に籍を置いてから恒藤先生の影響ですよ。その前には、学生の中には唯物論への傾斜は非常に強くて、ポストを得たために法哲学の中の法律の領域の中に閉じ込められてという動きがあったんじゃないか。加古君をなじったのが、四条の大橋のあの辺の所で偶然会って、そういうことがちよつと頭に残っててね。

恒藤先生も社会科学研究会の、河上さんと並んで指導者であったけれども、その時は恒藤先生は、唯物論のこういうところは参考になるけれど、こういうところはいかんという第三者的批判だね。そういうタイプの人で、だから大学の教授として伸びるためには、あまり唯物論の本を読むなという請求が、恒藤先生からあったんじゃないかな。そいつをぼくは裏切り者という言葉は使わなかったけども、なじったことがある。梯さん、まあ我慢してくださいよ、というようなことを加古君が言いよった。ぼくは責めるつもりで言った

んじゃないけど、何が動機でそういうことになったかね。これはぼくが卒業して後のことや。」

七、初期マルクスの影響

—— 加古さんの本に、昭和六、七年頃から『ドイツ・イデオロギー』の引用が有るんです。それと平野義太郎さんの『史的唯物論と法律』に対する批評文で、加古さんは不満らしくて、『ド・イデ』をもっと研究して、それをもっと利用すべきだと書いてあるんですが。

「結局辞書的な意味があるんで、マルクス、エンゲルスで関係するものを抜粋してきたというだけのことですね。」

ぼくは『私の歩み』の中に経済哲学会を設立すべきだと。経済学者は哲学をしらないやつばかりが、経済学者になってるんで、そのことについて恒藤先生に聞いてみたんじや。そうすると法学と経済学その成立状況が違うと。これは中世の目的論を排除するという、目的論すなわち観念論、ソビエトの唯物論はそうや。経済学は、十七世紀の自然法学、それから十八世紀に入ってスミスが出てくるという。そいつは哲学からはなれて、自然科学の方法を社会の諸領域に適用するというのが経済学で、ところが、哲学と縁を切るというところに科学としての経済学が成立し、発展すると。それに対して法学というのは、源を探るとギリシャに行っちゃうんですよ。プラトンの国家論にしてもアリストテレスのものも経済現象を分析している。

日本でも法哲学会は存在しとって、経済哲学会は無いんですよ。恒藤先生の解答からなるほどと思ったことやけど、経済学方法論ならば経済学のワンセットに入っておる、哲学は漏れてるとの考えを持つてるやつ

がおるんだ。結局経済哲学は、経済学に入らんというにもかかわらず、法学界には法哲学があつて法学概論の一番先に法哲学、それから法学の原理と、こう並ぶわけですよ。しかもマルクス主義の立場に立つ諸君の多い各大学で、大河内一男さんに東大ではなんで経済哲学を置かんのやという、いや経済原論でそいつを間に合わしとるといふようなことで全然しようがないんだ。むしろ関西の大学で法哲学や経済哲学を置くというのがある。

細分化された法学及び経済学を根本で総合してその原理をはっきりしていくという大事な科目が経済哲学及び法哲学。それに対する評価が、法学の方が進んでいる。加古君の方が法哲学をやるということは、ぼくが経済学部の中で経済哲学をやるよりもむしろ、その理解者が彼の周辺に多いことはいえると思うな。」

——　そこで加古さんによると『ドイツ・イデオロギー』ないし『国民経済学と哲学』というものについてもつとやれば、もつと法理論についての研究が深まるだろうという考えがあつただろうと思うんですが。

「そうよ。その時はまだ古典経済学と俗流経済学との区別をマルクスがやっていない段階や。一八四四年だろう。」

——　そうすると『経・哲草稿』が全国的に評価されたのは戦後なんで、それをすでに加古さんはやってたわけですね。

「俺は、それについて簡単なやつだけど、唯研が文句つけるのは、ぼくのもんばかり毎号載るんというんで、『社会』という同人社から出る薄っぺらな雑誌に『資本論』関係の論文を三つ位載せてね。そこには、「人間労働の資本主義的自己疎外」というこれは『経・哲草稿』ですよ。戦前に読んでおつて、西田さんに

見せたら、これは面白いから原本を持って来いという。だから加古君も期せずしてぼくと同じような歩みをしてるわけやな。」

——『ドイツ・イデオロギー』とか『経・哲草稿』については戦前から法律の面では、京都ではそういうことをやる雰囲気というのはあったわけですね。

「あつたよ。『経・哲草稿』はソビエトにおけるマルクス、エンゲルス全集の付録にのるんだな。で他の若きマルクス時代の労作を付録にそいつを補巻の中に入れる。これは政治的にどう意図があつてね。まあ演出というか、ソビエトのそういう編集の方針をやつたかね。もうひとつ、政治的意図によるのかあるいは学問的な評価が違うのかね。扱い方が初期マルクスの中で『経・哲草稿』が非常に重要だというようなことをソビエトの哲学界、経済学者は持っていないんじゃないですか。

で東京は、既に共産党が入って、その指令の下に勉強するというような態度が多いんだ。京都はそういう政治的な配慮がこう地理的に離れておるんで、そういう点で、思索の自由があるんでね。ぼくもそういう意味で、人間疎外というようなことを、これは物神論と、まあこれは『資本論』にかかわっておるんで、まあ物神論と人間疎外とは違うんだけどね。そこがどういう意味で『経・哲草稿』を軽視したのかどうか、というのは、日本もそれを踏襲している。

まあとにかく、ぼくなり加古君も独自に利用した。マルクス、エンゲルスがドイツから出てくると、その翻訳も翌年に改造社から、円本時代でね。そこにちゃんと『経・哲草稿』が翻訳されとるんだよ。そこへぼくは目をつけ加古君もそこへ目をつけた。こういうことやな。

東京のことはよく知らんけど、おそらくそういうことは、主体性というやつは、やつぱりそこにひっかかってくるんですよ。自己疎外やから、疎外からの回復というこういう動きね。その主体性を入れるとねソビエトなんかは困るわけや。全国民が労働者だからそいつが疎外されているという困るんで、社会主義的人間として疎外から回復したということを『経・哲草稿』はそういう面からも、社会主義が疎外されてるといふそいつを回復するのが革命だということはおそらくはソビエトではすんでおる。

マルクスがヘーゲルを批判したでしょう、だからヘーゲルをやる必要が無いというのがソビエトの哲学者だな、まあその時の空気だったね。そんなのが続いているんだよ。

でまた経済学と哲学の関連で、マルクスがマルクス主義者になる一番大事な『経・哲草稿』をソビエトの学界は評価しとらんのだ。だから主体性というのをもうやるのだね。意識の外に物質の哲学的把握というレーニンの概念がね物質の哲学的概念、意識の外の客観的存在これは認めない。そいつが自己運動やないかというそれは、因果関係で動いているというだけや。それをぼくは目的論的に生命を生む方向に天体は、そして地球は発展したんだという思想になるんだけど、レーニンの物質の自己運動の自己運動の面の強調というのはソビエトには無いわけですよ。だから物質の主体というやつはソビエトで出て来ん。

そんなことを東京ですると共産党員のあれから当時は、「プロ科」とかそういうやつからぐんぐんやつつけられて、そういう方向に伸びようがないんじゃないや東京という所は、全然ね。そこで参考になる文章だけを拾うてやるのが、平野さんの辞引きとしては便利で、しかし平野氏の理論は無いわけや。法哲学的な法理論的なこともないわけや。」

八、唯物史観法学の可能性

—— 唯物史観を軸として法理論はどういうふうに関係することが可能なのでしょうか。

「まあ、単に唯物史観の公式は土台と上部構造と、イデオロギーが一番上にあつて下から制約されると、いわゆる逆の関係もあるとこれは東京の諸君も言っておるんだな。それよりももう少し深いのは、加古君の場合は、法学の独自性や『資本論』を読むにしても『資本論』を経済学とすれば法学としての原理は、法を法たらしめる原理は何であるかということにいくわけですな。ぼくが経済学をやっても、結局経済学の細分化されたそれぞれの専門を総合するとその総合の原理が経済哲学だね。しかしそのことが同時にね、経済学と関連のある社会科学としての法学、政治学の原理の追求にもなるわけですよ。

特にマルクス主義の場合は『資本論』に出て来る交換過程の所有、契約というやつはヘーゲルの抽象法で、そいつが法学の方の出発点にもなるし、経済学の出発点になるということです。その点はぼくが経済哲学から法哲学に行くように、加古君は法哲学から経済哲学へと。要するに原理を追求するという意味で、社会科学の他の部門としての政治学、法学、それから経済学と三つを統一する原理があるんだというところへ行かざるを得ない。

パシユカーニスなんかをすでに早くから加古君が扱っている。『資本論』の商品及び商品交換ということから、そこが現在のマルクス主義法学と一致しているんですよ。所有、契約、『資本論』の交換過程と。そして商品主体と法的人格、これも結局これには、商品所有者が法的人格ということ以前に多くの価値形態論の分析のように物としての商品が相互に関係し合うその人格的表現が法的人格あるいは、商品の主体、所有者、

だからパシユカーニスも流通主義になる。生産過程から法的なアンファングを生産過程に入れることによって、基本的人権、団結権というようなことが出てくる。

加古君は経済的土台の上にある法及び政治のそいつを対象とした法学及び政治学の自立というものを追求していかなければいかんという問題意識だ。そして下から制約されて、上からまた逆に反作用するというだけじゃなくて、マルクス主義における法学および政治学及び経済学がそれぞれの自立性を持つためには、いわゆる法的なものとは、唯物的には何であるのか、経済的なものとは、唯物論的に何であるかということを解明しなければいかん。そういうことをぼくが気がつたのは、戦後で戦前から加古は、そいつに気づいているといふことになるわけで、ぼくよりかなり問題意識がシャープなんじゃないかな。」

大橋 智之輔（法政大学名誉教授）

村田 淳（フリー・ライター、エディター）

「蔵書」リスト

和書 I

- 一 哲學通論 田邊 元著
- 二 哲學叢書 哲學概論 宮本和吉著
- 三 哲學概論 桑木嚴翼著
- 四 哲學概論 ヴィンデルバンド著 松原寛譯
- 五―六 ブレルーディエン（序曲）上卷・下卷・ヴィンデルバンド著 河東、篠田共譯
- 七 西洋哲學史要 波多野精一著
- 八―九 一般哲學史・一・二 ヴィンデルバンド著 井上忻治譯
- 一〇 西洋哲學史 大西祝著
- 一一 大哲學史（古代篇上） ユーベルエーク著 山本光雄譯
- 一二 大哲學史（最近代上） ユーベルエーク著 豊川昇譯
- 一三 大哲學史（近世下） ユーベルエーク著 加藤將之譯
- 一四 近代世界觀成立史 上卷 ボルケナウ著 横川、新島共譯
- 一五 近世哲學史 上卷 フォイエルバッハ著 松本義雄譯
- 一六 近世に於ける「我」自覺史 朝永三十郎著

- 一七 十九世紀獨逸思想家 ヴィンデルバンド著 吹田順助譯
- 一八 中世哲學歷史的探究の現代的價值 グラープマン著 武田信一譯
- 一九 哲學思想の史的考察 ウンターマン著 森喜一譯
- 二〇 獨逸古典文學史批判 パウル・ライマン著 岡田光雄譯
- 二一 文學史方法論 三木 清著
- 二二 大思想家(カント、ヘーゲル、フイヒテ、シエリング) パウル・メンツェル其他共著 大橋勉譯
- 二三 現代のための哲學 戸坂 潤著
- 二四 現代の哲學 高橋里美著
- 二五 哲學とは何か 戸田、坂田、三木共譯
- 二六 哲學讀本 山崎 謙著
- 二七 哲學の進歩 大日本學術協會編
- 二八 形而上學 ワルター・エアリヒ著 齋藤响譯
- 二九 觀念論と實在論との批判 ハルトマン著 栗田賢三譯
- 三〇 形而上學とは何ぞや ハイデッガー著 湯淺誠之助譯
- 三一 存在論と辯證法 大江精志郎著
- 三二 批判的存在論一般は如何にして可能なるか ハルトマン著 桂壽一譯
- 三三 宗教哲學の主要問題 エルンスト・トレルチ著 佐野勝也譯

- 三四 宗教哲學の本質及其根本問題 波多野精一著
- 三五 人間の學としての倫理學 和辻哲郎著
- 三六 倫理學の根本問題 阿部次郎著
- 三七 倫理學の根本問題 西晉一郎著
- 三八 哲學叢書 論理學(增訂版) 速水 滉著
- 三九 論理學の原理 ヴィンデルバンド著 近藤哲雄譯
- 四〇 心理學 高橋穰著
- 四一 スピノザ 篁實著
- 四二 スピノザ論理學 阿部能成著
- 四三 ヒューム人性論 大島正徳著
- 四四 全知識學の基礎其他 フイヒテ著 木村素衛譯
- 四五 認識の對象 リッケルト著 山内得立譯
- 四六 哲學叢書 認識論(改訂版) 紀平正美著
- 四七 充足根據の原理 ショペンハウエル著 景山哲雄譯
- 四八 社會學の方法的原理 ウェーベル著 坂田太郎譯
- 四九 道德的事實の決定 デュルケーム著 平山高次譯
- 五〇 社會科學方法論 カール・メンガー著 岩野、竹原、長共譯

- 五一 科學と方法 ポアンカレ著 山本修譯
- 五二 近代歴史學 ランブレヒト著 和辻哲郎譯
- 五三 イデオロギー概論 戸坂潤著
- 五四 歴史哲學の諸問題 米田庄太郎著
- 五五 歴史意識 馬場啓之助著
- 五六 歴史敘述の理論及歴史 クロオチエ著 羽仁五郎譯
- 五七 歴史學批判序説 羽仁五郎著
- 五八 轉形期の歴史學 羽仁五郎著
- 五九 藝術活動の起原 フイドラー著 金田廉譯
- 六〇 数理哲學概論 ラッセル著 宮本鐵之助譯
- 六一 数理哲學研究 田邊 元著
- 六二 哲學叢書 最近の自然科學 田邊 元著
- 六三 所謂相對的眞理について トワルドウスキー著 池上鎌三譯
- 六四 實體概念と關係概念 カッシラー著 馬場和光譯
- 六五 プロレゴメナ (カント著作集6) 桑木嚴翼、天野貞祐譯
- 六六 純粹理性批判 上卷 (カント著作集1) 天野貞祐譯
- 六七 純粹理性批判 下卷 (カント著作集2) 天野貞祐譯

- 六八 論理學 (カント著作集10) 田邊重三譯
- 六九 カント實踐理性批判 波多野、宮本共譯
- 七〇 カント道徳的哲學原論 安部、藤原共譯
- 七一 道徳哲學 (カント著作集8) 白井成允譯
- 七二 道徳の形而上學 ショウペンハウエル著 景山哲雄譯
- 七三 カント判斷力批判 坂田徳男譯
- 七四 判斷力批判の研究 川村豊郎著
- 七五 カントの目的論 田邊 元著
- 七六 宗教哲學 (カント著作集5) 安部能成譯
- 七七 一般歴史考其他 (カント著作集13) 木村、田中、高坂共譯
- 七八 イムマヌエル・カント パウルゼン著 伊達、丸山共譯
- 七九 カントと現代の哲學 桑木嚴翼著
- 八〇—八一 カントと現代の哲學的課題 バウホ著 古在由重譯
- 八二 カント純粹理性批判 天野貞祐著
- 八三 カント實踐理性批判 和辻哲郎著
- 八四 先驗的觀念論 シェリング著 赤松元通著
- 八五 自由意志論 シェリング著 西谷啓治譯

- 八六 シェリング 勝田守一著
- 八七 哲學史(上)(ヘーゲル全集1) 武市健人譯
- 八八 精神哲學(ヘーゲル全集3) 船山信一譯
- 八九 論理學 ヘーゲル著 速水敬二譯
- 九〇 大論理學 (第一部) ヘーゲル著 河野正通譯
- 九一 スピノザとヘーゲル 國際ヘーゲル聯盟日本版
- 九二 ヘーゲル哲學概論 高橋里美譯
- 九三 ヘーゲル哲學と辯證法 田邊 元著
- 九四 ヘーゲルの哲學 クコーナー著 岩崎、大江譯
- 九五 ヘーゲル主義とマルクス主義 マルツク著 奈良岡茂譯
- 九六 アリストテレスとヘーゲル ハルトマン著 樺俊雄譯
- 九七 ヘーゲル辯證法 ニコライ・ハルトマン著 長屋、日高、小松共譯
- 九八 「カント」より「ヘーゲル」へ ロイス著 小倉好雄譯
- 九九 ヘーゲルと其の時代 ハイム著 松本芳景譯
- 一〇〇 カントからヘーゲルへ 小川、佐藤、岡田共譯
- 一〇一 ヘーゲル哲學批判 クローチエ著 高見澤榮壽譯
- 一〇二 ヘーゲル研究 務臺理作著

- 一〇三 ヘーゲル哲學の批判 フォイエルバッハ著 佐野文夫譯
- 一〇四 基督教の本質(補遺) フォイエルバッハ著 木暮浪夫譯
- 一〇五 ヘーゲル復興と新ヘーゲル主義 グロックナー著 大江精志郎譯
- 一〇六 フツセル 下程勇吉著
- 一〇七 カントとフツサル エーアリツヒ著 齋藤响譯
- 一〇八 フツセル現象學 高橋里美著
- 一〇九 現象學叙説 山内得立著
- 一一〇 存在の現象形態 山内得立著
- 一一一 現象學に就て ライナハ著 池上謙三譯
- 一一二 現象學の問題 キーナスト著 高階順治譯
- 一一三 哲學的人間學 シェラー著 樺、佐藤共譯
- 一一四 コーエン純粹認識の論理學 藤岡藏六譯述
- 一一五 純粹意志の倫理學 コーエン著 村上寛逸譯
- 一一六 精神科學序説 デイルタイ著 三枝博音譯
- 一一七 哲學の本質 デイルタイ著 勝部謙造譯
- 一一八 世界觀學 デイルタイ著 船山信一譯
- 一一九 解釋の成立 デイルタイ著 池島重信譯

- 一一〇 道德宗教の二源泉 ベルグソン著 平山高次譯
- 一一一 物質と記憶 ベルグソン著 高橋里美譯
- 一二二 ベルグソンと現代思想 野村限畔著
- 一二三 文化價值と極限概念 左右田喜一郎著
- 一二四 哲學の根本問題 西田幾多郎著
- 一二五 哲學の根本問題(續編) 西田幾多郎著
- 一二六 善の研究 西田幾多郎著
- 一二七 思索と體驗 西田幾多郎著
- 一二八 現代に於ける理想主義の哲學 西田幾多郎著
- 一二九 意識の問題 西田幾多郎著
- 一三〇 自覺に於ける直觀と反省 西田幾多郎著
- 一三一 哲學論文集(第一) 西田幾多郎著
- 一三二 觀念論から唯物論へ 船山信一著
- 一三三 思想家としてのマルクス アドラー著 山田秀男譯
- 一三四 唯物史觀批判 シュタムラー著 國松久彌譯
- 一三五 唯物史觀と現代の意識 三木清著
- 一三六 社會科學の豫備概念 三木清著

- 一三七 ドイツ・イデオロギー第一分冊 唯物論研究會譯
- 一三八 イデオロギーの論理學 戸坂潤著
- 一三九 認識論としての辯證法 船山信一著
- 一四〇 物質の哲學的概念 梯 明秀著
- 一四一 ハインリッヒ・リツケルト ファウスト著 大江精一譯
- 一四二 リツケルト價值哲學 松永 材譯
- 一四三 體系的方法 ニコライ・ハルトマン著 橋高倫一譯
- 一四四 因果性の問題 ボグダノフ・ミハイロワ著 廣島定吉譯
- 一四五 意志の自由 ヴィンデルバンド著 戸坂潤譯
- 一四六 範疇の體系に就て ヴィンデルバンド著 篠田英雄譯
- 一四七 法則の概念について ヴィンデルバンド著 下村寅太郎譯
- 一四八 正義善靈魂の唯物史觀 ラファルグ著 萩原厚生譯
- 一四九 將來哲學の根本命題 フォイエエルバッハ著 岡村幸二譯
- 一五〇 自然辯證法 吉田、石原共著
- 一五一 社會起源論 梯 明秀著

和書Ⅱ

- 一 法哲學 尾高朝雄著
- 二 社會哲學的法理學 中島 重著
- 三 法律哲學原理 三谷隆正著
- 四 法律哲學概論 パウンド著 北川、星野共譯
- 五 法律史觀 パウンド著 高柳賢三譯
- 六 法と道徳 高柳、岩田共譯
- 七 法律哲學概論 第一分冊 田中耕太郎著
- 八 法律哲學原理 高柳賢三著
- 九 法理學 丸山長渡著
- 一〇 法理學大綱 穂積重遠著
- 一一 法理學 第一編 算 克彦著
- 一二 私法學序説 廣濱嘉雄著
- 一三 カントの法律哲學 船田亨二著
- 一四 法律哲學概論 ハルムス著 恒藤恭譯
- 一五 自由の理念と國家の理念 フイヒテ著 三士興三譯
- 一六 法の哲學 ヘーゲル著 速水、岡田共譯

- 一七 法律及經濟の文化的觀察 ベロルツハイマー著 中村萬吉譯
- 一八 法律哲學 ラスク著 恒藤恭譯
- 一九 法律及び法律學の本質 シュタムラー著 中島慎一譯
- 二〇 規範學又は文化科學としての法律學 ケルゼン著 阿武京二郎譯
- 二一 民法におけるローマ思想とゲルマン思想 平野義太郎著
- 二二 批判的法律哲學の研究 恒藤 恭著
- 二三 ローマ法における慣習法の歴史及理論 恒藤 恭著
- 二四 國際法及び國際問題 恒藤 恭著
- 二五 法律學の價值に關する懷疑 田村徳治著
- 二六 行政學と法律學 田村徳治著
- 二七 法律哲學 メンガー著 都留佃譯
- 二八 自然法學と法實證主義 ケルゼン著 黒田覺譯
- 二九 純粹法學 ケルゼン著 横田喜三郎譯
- 三〇 ケルゼンの純粹法學 大澤、清宮、黒田、矢部、横田共譯
- 三一 ウィン學派の法律學と其の諸問題 黒田 覺著
- 三二 國際法の基本問題 大澤、野見山共譯
- 三三―三四 世界法の理論 第一卷・第二卷 田中耕太郎著

- 三五 カトリック研究 東大カトリック研究会編
- 三六 法と宗教と社會生活 田中耕太郎著
- 三七―三九 法律進化論 第一卷・第二卷・第三卷 穗積陳重著
- 四〇 神權説と民約説 穗積陳重著
- 四一 慣習と法律 穗積陳重著
- 四二 法の社會倫理的意義 イエリネック著 大森英太郎譯
- 四三 公法變遷論 デュギー著 木村常信譯
- 四四 私法變遷論 デュギー著 西島彌太郎譯
- 四五 自然法の再生 シャルモン著 大澤章譯
- 四六 自然法の社會化 森吉義旭著
- 四七 法の本質 美濃部達吉著
- 四八 公法と私法 美濃部達吉著
- 四九 大思想エンサイクロペディア（法律學）
- 五〇 法律學の根本問題 奈良正路著
- 五一 法律學の基礎觀念 奈良正路著
- 五二 資本主義の法律的基礎 カール・デイール著 櫻井誠之譯
- 五三 法の一般理論とマルキシズム パシュカーニス 山之内一郎譯

- 五四 サヴェート法思想の發展過程 スタリゲヴィッチ著 山之内一郎譯
- 五五 サヴェート法並國家の哲學的基礎 クルイレンコ著 大竹博吉譯
- 五六 過渡期國際法 コローヴィン著 山之内一郎譯
- 五七 法律制度の社會的機能 カルネル著 後藤清譯
- 五八 民法と無產階級 メンガー著 井上登譯
- 五九 現代の文化と法律 牧野英一著
- 六〇 民法と社會主義 岡村 司著
- 六一 英米法の精神 バウンド著 山口喬藏譯
- 六二 サウイニー・テイボー法典論議 長場正利譯
- 六三 ギールケ團體法論 石田文治郎著
- 六四 西法立法史 栗生武夫著
- 六五 中世私法史 栗生武夫著
- 六六 判例と理論 京城帝大法學會編
- 六七 立命館三十五周年論文集 法經篇
- 六八 朝鮮社會法制史研究 京城帝大法學會
- 六九 日本法制史 第一分冊 牧健 二著
- 七〇 明治文化全集第八卷（法律篇）

- 七一 法學餘錄 末川 博著
- 七二 中世寺院法と經濟思想 山口正太郎著
- 七三—七六 サヴェート法論 第一卷—第四卷 マゲロウスキー著 山之内一郎譯
- 七七—七八 法律學概論 小松泰馬著
- 七九 法學通論 孫田秀春著
- 八〇 法學通論 金森徳次郎著
- 八一 法學通論 三瀨信三著
- 八二 日本法制原論 中村萬吉著
- 八三 法制經濟大意 野村信孝著
- 八四—一〇五 現代法學全集(1、2、3、4、5、6、7、8、10、17、20、22、24、27、31、32、33、34、35、36、37、
- 38) 卷
- 一〇六 現行法令大全 大日本行政學會 昭和二年
- 一〇七 大審院民事判例要旨類集 大正二年
- 一〇八 大審院刑事判例要旨類集 大正二年
- 一〇九—一一七 判決要録 第五卷—第十三卷

和書Ⅲ

- 一 憲法學概論 淺井 清著
- 二 憲法學の基礎理論 田畑 忍著
- 三 憲法の歴史的的研究 鈴木安藏著
- 四 比較憲法史 鈴木安藏著
- 五 憲法の本質 ラッサール著 淡徳三郎譯
- 六 戦後の新憲法 美濃部達吉著
- 七 ソヴェット憲法 ア・ロシューテン著 佐田弘雄譯
- 八 改正露西亞社會主義聯邦ソヴェート共和國憲法 田和一夫譯
- 九 ガーイウス羅馬法解説 末松謙澄譯註
- 一〇 ユスチニアース羅馬法學提要 末松謙澄譯註
- 一一 ウルピアーヌス羅馬法範 末松謙澄譯註
- 一二 民法大意 末川 博著
- 一三―一四 民法大意 上下 末川 博著
- 一五 日本民法要論 卷一 曄道文藝著
- 一六 破毀判例民法研究 第二卷 末川 博著
- 一七 民法に於ける特殊問題の研究 第二卷 末川 博著

- 一八 民法の基本問題 牧野英一著
- 一九 民法研究 第一卷 鳩山秀夫著
- 二〇 契約總論 末川 博著
- 二一 權利侵害論 末川 博著
- 二二 增訂 日本債權法各論(上) 鳩山秀夫著
- 二三 英米契約法原理 谷口知平著
- 二四―二五 物權法提要(上下) 三瀨信三著
- 二六―二七 物權法(上、下ノ一) 末弘嚴太郎著
- 二八 借家法及借地法 三瀨信三著
- 二九 親族法論 奥田義人著
- 三〇 親族法大意 穂積重遠著
- 三一 相續法大意 穂積重遠著
- 三二―三四 民法理由 上・中・下 岡松參太郎著
- 三五 フランス民法の變遷 カピタン著 杉山直治郎譯
- 三六 獨逸民法 東 季彦譯
- 三七 ロシア民法 廣岡光治譯
- 三八 改訂 刑法講義 瀧川幸辰著

- 三九 刑法各論 瀧川幸辰著
- 四〇 日本刑法 牧野英一著
- 四一—四三 刑法學綱要(第一・二・三分冊) 宮本秀脩著
- 四四 刑事講義(各論) 小野清一郎著
- 四五 刑事訴訟法 牧野英一著
- 四六 刑事訴訟法講義 小野清一郎著
- 四七 刑事判例研究 瀧川幸辰著
- 四八 刑法研究 第一卷 牧野英一著
- 四九 罪刑法定主義と犯罪徵表説 牧野英一著
- 五〇 刑事學の新思潮と新刑法 牧野英一著
- 五一 犯罪と刑罰 ベツカリーヤ著 風早八十二譯
- 五二 マルクス主義と刑法 ピオントコフスキー著 井藤譽志雄譯
- 五三 二十世紀に於ける死刑 カルウアート著 竹田直平譯
- 五四 ロシア刑法 廣岡光治譯
- 五五 陪審裁判 瀧川幸辰著
- 五六 陪審裁判 瀧川幸辰著
- 五七 民事訴訟法記録 吉川大二郎著

- 五八 身元保證法釋義 吉川大二郎著
- 五九 破産法綱要 井上直三郎著
- 六〇 國際法序論 大澤 章著
- 六一 社會法と市民法 橋本文雄著
- 六二 社會法の研究 橋本文雄著
- 六三 労働法原理 津曲藏之丞著
- 六四 労働法原理 山口正太郎著
- 六五―六六 労働法(上下) ピック著・協調會譯
- 六七 労働法總論 孫田秀春著
- 六八 労働法論(總論各論上) 孫田秀春著
- 六九 労働法通義 孫田秀春著
- 七〇 労働法要論 兒玉兼道著
- 七一 労働法大意 柴田義彦著
- 七二 労働法提要 カピタン、キューシユ著 星野辰雄、石崎政一郎譯
- 七三 労働協約理論史 後藤 清著
- 七四 労働契約の研究 八木清信著
- 七五 労働協約の法學的構成 中村萬吉著

- 七六 當面の勞働法問題 後藤 清著
- 七七 勞働法研究 末弘嚴太郎著
- 七八 勞働組合法案研究 柴田義彥著
- 七九 勞働組合法の生成と變轉 山中篤太郎著
- 八〇 日本勞働組合法研究 山中篤太郎著
- 八一 勞働組合法案批判 文明協會編
- 八二 日本工場法と勞働保護 神田孝一著
- 八三 國際聯盟、國際勞働立法 園 乾治著
- 八四 各國法制上より見たる勞働團結の自由 國際勞働局編
- 八五 獨逸勞働保護法案並に理由書 社會局勞働部編
- 八六 獨逸勞働法原論 ヴェ・マタイ著
- 八七 ソビエト勞働法 胡麻本篤一譯
- 八八 ソビエトロシヤの民法と勞働法 末川 博著
- 八九 ソビエトロシヤの農業法と勞働法 淺野利三郎著
- 九〇 ソヴィエト聯邦の集團農業附土地法 廣岡光治譯
- 九一 英國社會主義立法 大濱信忠著
- 九二 救護法と失業保檢 山岡龍次著

九三 羅馬法 船田亨二著

九四 古代法律 メーン著 小泉鐵譯

和書Ⅳ

一 國家の研究（京城帝大法學會論集）

二 國家哲學 ステルンベルヒ著 高橋正男譯

三 國家哲學 浮田和民解説

四 國家變遷論 デュギー著 木村亀二譯

五 シュパン眞正國家論 阿部、三澤共譯

六 新國家論 メンガー著 河村又介譯

七 現代國家批判 長谷川如是閑著

八 多元的國家論 中島 重著

九 ケルゼン 國家概念研究 堀 眞琴譯

一〇 ケルゼンの國家理論 黒田 覺著

一一 政治學概論 高橋清吾著

一二 政治學概論 戸澤鐵彦著

一三 政治學要論 今中次麿著

- 一四 政治學に於ける方法二元論 今中次磨著
- 一五 政治學說史 今中次磨著
- 一六 政治思想史 今中次磨著
- 一七 獨裁政治論 今中次磨著
- 一八 現代獨裁政治學概論 今中次磨著
- 一九 ファシズム運動論 今中次磨著
- 二〇 現代獨裁政治論 堀眞琴著
- 二一 ファシズム論 今中次磨、貝島兼三郎著
- 二二 ファシズム獨裁と勞働統制 貝島兼三郎著
- 二三 日本ファシズム批判 長谷川如是閑著
- 二四 政治學說史大要 カスパリー著 藤本直譯
- 二五―二六 政治思想史 上下 ゲッテル著 鷲野隼太郎譯
- 二七 民主政治と獨裁政治 ケルゼン著 西島芳二譯
- 二八 無産政治概論 蠟山政道著
- 二九 民衆政治 メンガー著 藤本直譯
- 三〇 英國會之起源並進展 占部百太郎著
- 三一 國際問題研究 第一輯 國際問題研究會編

三二 現代社會學問題 分冊

現代政治哲學問題 綿貫哲雄著

現代經濟哲學問題 二木保幾著

現代法律哲學問題 鈴木義男著

現代生物哲學問題 永井 潛著

現代自然科學問題 伊藤徳之助著

現代數理哲學問題 白布早出雄著

三三 大思想エンサイクロペディア（社會學）

三四 社會學概論 高田保馬著

三五 社會學原理 高田保馬著

三六 社會關係の研究 高田保馬著

三七 國家と階級 高田保馬著

三八 社會學講話 山田進著

三九 社會學 新明正道著

四〇 知識社會學の諸相 新明正道著

四一 知識社會學 社會學研究會編

四二 知識社會學批判 小松堅太郎著

- 四三―四五 社會經濟體系（8、14、4）卷
- 四六 未開社會の思惟 レキ・ブルユル著 山田吉彦譯
- 四七 社會學原理 井上吉次郎著
- 四八 共同社會結社國家 マキーバー著 原實譯
- 四九 古代家族 クーランジ著 中川善之助譯
- 五〇 社會學批判序說 清水幾太郎著
- 五一 社會と個人（上） 清水幾太郎著
- 五二 ジムメル社會學論 スパイクマン著 山下覺太郎譯
- 五三 社會學の根本問題 ジンメル著 小田秀人譯
- 五四 社會學研究法 デュルケム著 田邊壽利譯
- 五五 新國際主義 田村徳治著
- 五六 社會的分化論 ゲオルグ・ジンメル著 五十嵐信譯
- 五七 タルドの社會學原理 タルド著 風早八十二譯
- 五八―五九 社會分業論（前後） デュルカイク著 井伊亥太郎譯
- 六〇 フランスの社會科學 フランス學會編
- 六一 猿と人間と社會 林 要著
- 六二 社會主義及び社會運動 ソムバルト著 林要譯

- 六三 カトリック的社會秩序改新策 上智大學譯
- 六四 新社會設計圖 大岩 誠著
- 六五 思想讀本 土田杏村著
- 六六 新カント派の社會主義觀 横濱社會問題研究所編
- 六七 政治的民主主義と社會的民主主義 アドラー著 田畑忍譯
- 六八 技術論 相川春喜著
- 六九 價值論と社會主義 小泉信三著
- 七〇 近世社會思想史大要 小泉信三著
- 七一 社會思想史研究(第一卷) 河合榮治郎著
- 七二 近世社會學成立史 加田哲二著
- 七三 市民社會史 ウイットフォーゲル著 新島繁譯
- 七四―七五 ロシア社會史 ポクロフスキイ著 外村史郎譯
- 七六 史論集 ポクロフスキイ著 吳雅史譯
- 七七 明治維新史 服部之總著
- 七八 前資本主義社會經濟史論 ライハルト著 永住道雄譯
- 七九 唯物史觀(全集第一卷) 櫛田民藏著
- 八〇 民族の起源及び其の發達 ブロイド著 高橋實譯

- 八一 概観世界思潮 坂口昂著
- 八二 西洋中世史の研究 植村清之助著
- 八三 歴史論 服部之總著 (唯物論全書)
- 八四 世界歴史大系 第二十四卷
- 八五 特殊問題研究 戸田海市著
- 八六 社會政策論 戸田海市著
- 八七 社會政策原理 (現代經濟學全集) 河合榮治郎著
- 八八 社會政策新原理 林 癸未夫著
- 八九 社會問題各論 (現代經濟學全集) 林 癸未夫著
- 九〇 社會問題十二講 生田長江、本間久雄著
- 九一―九五 社會問題體系第一・第二・第三・第四・第六卷 河田嗣郎著
- 九六 失業補償論 森田良雄著
- 九七 勞働組合法論 永井亨著
- 九八 勞働組合とは何ぞや 松永義雄著
- 九九 勞働組合法案に關する實業團體の意見 日本工業クラブ調査課編
- 一〇〇 英國勞働組合運動 渡邊鐵藏著
- 一〇一 勞働者問題 プレンターノ著 森戸辰男譯

- 一〇二 最近ドイツ社會黨史の一齣 森戸辰男著
- 一〇三 全勞働収益盆權史論 アントン・メンガー著 森戸辰男著
- 一〇四 勞働組合運動史 ウェップ著 荒畑勝三、山川均譯
- 一〇五 各國勞働組合運動史 ネストリーブケ著 協調會譯
- 一〇六 獨米に於ける失業及其對策 協調會
- 一〇七 各國の社會政策 協調會
- 一〇八 獨乙社會保險 協調會
- 一〇九 英國に於ける失業及對策 協調會
- 一一〇 勞働年鑑（昭和九年） 協調會
- 一一一 國際勞働年鑑（昭和九年版） 國際勞働局東京支局編

和書V

- 一 ヘーゲル哲學と經濟科學 赤松 要著
- 二 精神科學的經濟學の基礎問題 石川興二著
- 三 統制經濟批判（日本統制經濟全集） 猪俣津南雄著
- 四 經濟哲學史 ジェームス・ボナー著 東晋太郎譯
- 五 古典經濟學の哲學的背景 山下芳一著

- 六 自然經濟と意志經濟 作田莊一著
- 七―八 經濟哲學の基本問題 杉村廣藏著
- 九 ジムメルの經濟哲學 恒藤 恭著
- 一〇 經濟法則の論理的性質 左右田喜一郎著 勝本鼎一譯
- 一一 經濟哲學の諸問題 左右田喜一郎著
- 一二 財政學基礎概念 土方成美著
- 一三 大思想エンサイクロペヂア (經濟學)
- 一四 道德の經濟的基礎 シュタウディンガー著 波多野鼎譯
- 一五 經濟學(經濟學叢書第一卷) 河津 暹著
- 一六 經濟學講義要綱 河津 暹著
- 一七 經濟讀本 太田正孝著
- 一八 ファショの統制經濟 加田哲二著
- 一九 經濟原論 レキシス著 田邊忠雄譯
- 二一 經濟綱要 作田莊一著
- 二二 純粹經濟學 中山伊知郎著
- 二三 英國經濟學史論 ロッシャー著 杉本榮一譯
- 二四 經濟學史 高橋誠一郎著

- 二五 英國經濟學史 プライス著 石渡六三郎譯
- 二六 フックス國民經濟學 安倍 浩譯
- 二八 經濟思想史概説 田中忠夫著
- 二九 私有財産制度論の變遷 高橋誠一郎著
- 三〇 マルクス價值論の排撃 土方成美著
- 三一 社會經濟史原論 マックス・ウエバー著 黒正嚴譯
- 三二 經濟的文明史論 ビュツヒア著 權田保之助譯
- 三三 日本經濟史概要 土屋喬雄著
- 三四 最近の日本經濟史 高橋龜吉著
- 三五 ソヴェエト聯邦計劃經濟史論 ポロック著 森谷克己譯
- 三六 ソヴェート・ロシヤの經濟及經濟政策 アイヘンバリット著 村井賢一郎譯
- 三七 獨裁制下のドイツ經濟 美濃部亮吉著
- 三八 日本農業論 戸田愼太郎著
- 三九 勞働經濟論 北澤新次郎著
- 四〇 統計學概念 蜷川虎三著
- 四一 經營經濟學（現代經濟學全集）中西寅雄著

Foreign Books

I

- I Aristoteles, — *Metaphysica*.
- I—III Aristoteles, — *Metaphysik*. 2 Bde. (Philos. Bibliothek)
- II Aristoteles, — *Nikomachische Ethik*. (Philos. Bibliothek)
- III Aristoteles, — *Ueber die Seele*. (Philos. Bibliothek)
- K Barth, P. — *Die Stoa* (Frommanns Klassiker) 1922.
- 七 Bentham, J. — *A Comment of the Commentaries*. (by C. W. Everett) 1.
- 八 Bergson, H. — *Essai sur les données immédiates de la conscience*. 1889.
- 九 Bergson, H. — *Matière et mémoire*. 1926.
- 10 Bergson, H. — *L'évolution créatrice*. 1925.
- 11 Bergson, H. — *Le rire*. 1927.
- 111 Bergson, H. — *Einführung in die Metaphysik*. 1929.
- 1111 Bolland, G. J. P. J. — *Hegels Encyclopadie*. 1906.
- 11111 Bonar, J. — *Moral Sense*. 1930.
- 111111 Bosanquet, B. — *Essentials of Logic* 1928.

- 一六 Brentano, F. — Sittliche Erkenntnis (Philos. Bibliothek)
 一七 Brentano, F. — Psychologie. Bd. 1. (Philos. Bibliothek)
 一八 Buchenau, A. — Kants Lehre vom kategorischen Imperative. 1913.
 一九 Bülow, F. — Die Entwicklung der Hegelschen Sozialphilosophie. 1920.
 二〇—二二 Cassirer, E. — Das Erkenntnisproblem. 3 Bde. 1920-1922.
 二三 Cassirer, E. — Freiheit und Form. 1918.
 二四 Cohen, H. — Ethik des reinen Willens. 4 Aufl. 1923.
 二五 Cohen, H. — Logik der reinen Erkenntnis. 3 Aufl. 1922.
 二六 Cohen, H. — Kants Theorie der Erfahrung. 4 Aufl. 1925.
 二七 Cohen, H. — Führende Denker. 1912.
 二八 Comte, A. — Abhandlung über den Geist des Positivismus. (Philos. Bibliothek)
 二九—三三 Comte, A. — Philosophie positive. (par É. Rigvlage 4 toms.)
 三四 Comte, A. — Discours sur l'esprit positif. 1923.
 三五 Croce, B. — Lebendiges und Totes in Hegels Philosophie. 1909.
 三六 Croce, B. — Historical Materialism and the Economics of Karl Marx. 1922.
 三七 Croce, B. — Philosophy of the Practical. 1913.
 三八 Descartes, R. — Oeuvres choisies. 1930.

- 三六 Dietzgen, J. — Philosophical Essays. 1906.
- 三九—四〇 Dilthey, W.
- W. Diltheys Gesammelte Schriften. Bd. I,II,III,IV,V,VII,VIII,XI,XII.
- 四一 Ehrlich, W. — Kant und Husserl. 1923.
- 四七 Driesch, H. — Leib und Seele. 3 Aufl. 1923.
- 四〇 Barth, P. — Geschichtsphilosophie Hegels und die Hegelianer. 1925.
- 四一 Eulenburg, F. — Gesellschaft und Natur. 1905.
- 四二 Feuerbach, L. A. — Unsterblichkeitsfrage. (Kroners Ausg.) 1923.
- 四三 Feuerbach, L. A. — Das Wesen der Religion. (Kroners Ausg.)
- 四四 Feuerbach, L. A. — Philosophie der Zukunft. (Frommanns Ausg.)1922.
- 四五 Feuerbach, L. A. — Gedanke über Tod und Unsterblichkeit. 1847.
- 四六 Fichte, J. G. — Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. 1911.
- 四七— 四八 Fichte, J. G. — Fichtes Schriften. (von F. Medicus) 6 Bde.
- 四九 Fichte, J. G. — Anweisung zum seligen Leben,(Deut. Bibliothek)
- 五〇 Fischer, K. — Geschichte der neueren Philosophie. (Hegel,I) 1911.
- 五一 Freyer, H. — Theorie des objektiven Geistes. 1928.
- 五二 Frischsen-Köhler, M. — Wissenschaft und Wirklichkeit. 1912.

- 六七 Gaunitz, H. — Präparation zu Platons Apologie des Sokrates. 11 Aufl.
 六八 Hartmann, N. — Ethik. 1926.
 六九 Hartmann, N. — Diessetts von Idealismus und Realismus. 1931.
 七〇 Hartmann, N. — Zum Problem der Realitätsgegebenheit. 1931.
 七一—七三 Hartmann, E. — Philosophie des Unbewussten. 3 Bde. 1923.
 七四—八四 Hegel, G. W. F. — Sämtliche Werke (Herausg. von Glockner) Bd. 1, 6, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19.
 八五 Hegel, G. W. F. — Phänomenologie des Geistes. (Philos. Bibliothek)
 八六—八七 Hegel, G. W. F. — Logik. 2 Bde. (Philos. Bibliothek)
 八八—八九 Hegel, G. W. F. — Philosophie der Weltgeschichte. (von Lasson g. W. VIII-IX)
 九〇 Hegel, G. W. F. — Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften (von Lasson g. W. V).
 九一 Heidegger, M. — Kant und das Problem der Metaphysik. 1929.
 九二 Heidegger, M. — Sein und Zeit 1. 2 Aufl. 1929.
 九三 Heidegger, M. — Vom Wesen des Grundes. 1931.
 九四 Heidegger, M. — Was ist Metaphysik? 1925.
 九五 Helander, S. — Marx und Hegel. 1922.
 九六 Herbart, J. F. — Sämtliche Werke. Bd. II. 1887.
 九七 Herder, J. G. — Mensch und Geschichte. (Kröners Ausg.) 1935.

- 九八 Hobbes, Th. — Lehre vom Körper. (Philos. Bibliothek)
- 九九 Hobbes, Th. — Lehre vom Menschen und vom Bürger. (Philos. Bibliothek)
- 一〇〇 Höfling, H. — Rousseau. (Frommanns Klassiker) 1895.
- 一〇一 Hönigswald, R. — Grundfragen der Erkenntnistheorie. 1931.
- 一〇二 Hume's Enquiries. (by L. A. Selby-Bigge) 1927.
- 一〇三 Husserl, E. — Idee zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. I. 1922.
- 一〇四—一〇六 Husserl, E. — Logische Untersuchungen. 3 Bde. 1922.
- 一〇七 James, W. — Pragmatism. 1907.
- 一〇八 Jensen, P. — Erleben und Erkennen. 1919.
- 一〇九 Kafka, G. — Aristoteles. 1922.
- 一一〇 Kant, I. — Kritik der Urteilskraft. (Philos. Bibliothek)
- 一一一 Kant, I. — Kritik der praktischen Vernunft. (Philos. Bibliothek)
- 一一二 Kant, I. — Kritik der reinen Vernunft. (Philos. Bibliothek)
- 一一三 Kant, I. — Prolegomena. (Philos. Bibliothek)
- 一一四 Kant, I. — Kritik der Urteilskraft. 1922.
- 一一五—一一六 Immanuel Kants Werke. (Cassirers Ausg.) 11 Bde.
- 一一七 Kautsky, K. J. — Ethik. 1922.

- | 二七 Kautsky, K. J. — Der Ursprung des Christentums. 1926.
 | 二八 Kistiakowski, Th. — Gesellschaft und Einzelwesen. 1889.
 | 二九 Korsch, K. — Marxismus und Philosophie. 1930.
 | 三〇 Korsch, K. — Die materialistische Geschichtsauffassung. 1929.
 | 三一 | — | 三二 | Lange, F. A. — Geschichte des Materialismus. 2 Bde. 7 Aufl. 1902.
 | 三三 | — | 三四 | Lask, E. — Gesammelte Schriften. 3 Bde.
 | 三五 K Levy, H. — Die Hegel-Renaissance. 1927.
 | 三六 Liebert, A. — Problem der Geltung. 1920.
 | 三七 Lipps, Th. — Die ethischen Grundfragen. 5 Aufl. 1927.
 | 三八 Litt, Th. — Philosophie und Zeitgeist. 1935.
 | 三九 Litt, Th. — Individuum und Gemeinschaft. 1926.
 | 四〇 Litt, Th. — Individuum und Gemeinschaft. 1926.
 | 四一 Lotze, H. — Metaphysik. (Philos. Bibliothek)
 | 四二 Luckács, G. — Moses Hess und die Probleme der idealistischen Dialektik. 1926.
 | 四三 Marx, K. — Elend der Philosophie. 1920.
 | 四四 Marx, K. — Misère de la philosophie. 1922.
 | 四五 Mehlis, G. — Probleme der Ethik. 1918.
 | 四六 Mehlis, G. — Einführung in ein System der Religionsphilosophie. 1917.

- 一四七 Meiklejohn, J. M. D. — Kant's Critique of Pure Reason. 1924.
- 一四八 Meinong, A. — Ueber Annahme. 3 Aufl. 1928.
- 一四九 Messer, A. — Erkenntnistheorie. 2 Aufl. 1921.
- 一五〇 Messer, A. — Die Philosophie der Gegenwart. 1924.
- 一五一 Mill, J. S. — Auguste Comte and Positivism.
- 一五二 Mill, J. S. — System of Logic. 1919.
- 一五三 Mill, J. S. — Autobiography.
- 一五四 Misch, G. — Lebensphilosophie und Phänomenologie. 1931.
- 一五五 Natorp, P. — Platons Ideenlehre. 2 Aufl. 1921.
- 一五六 Natorp, P. — Kant und die Marburger Schule. 1912.
- 一五七 Natorp, P. — Sozial-Idealismus. 1929.
- 一五八 Nink, S. J. — Kommentar zu Hegels Phänomenologie des Geistes. 1931.
- 一五九 Platon, — Phaidon. (Philos. Bibliothek)
- 一六〇 Platon, — Apologie des Sokrates und Kriton. (Philos. Bibliothek)
- 一六一 Platon, — Gastmahl. (Philos. Bibliothek)
- 一六二 Platon, — Platons Dialog Theätet. (Philos. Bibliothek)
- 一六三 Platon (Cron-Uhle.) — Platon, Verteidigungsrede des Sokrates, Kriton. 1929.

- 164 四 Plenge, J. — Hegel und die Weltgeschichte. 1931.
- 164 五 Poincare, H. — Wissenschaft und Methode. 1914.
- 166 六 Poincare, H. — Le science et l'hypothèse. 1920.
- 167 七 Radbruch, G. — Kulturlehre des Sozialismus. 1922.
- 168 八 Raphael, M. — Zur Erkenntnistheorie der konkreten Dialektik. 1934.
- 169 九 Reyburn, H. A. — Ethical Theory of Hegel. 1921.
- 170 〇 Reyer, W. — Einführung in die Phänomenologie. 1926.
- 171 一 Rickert, H. — Die Philosophie des Lebens. 1922.
- 171 二 Rickert, H. — Zur Lehre von der Definition. 1915.
- 173 三 Rickert, H. — Kant als Philosoph der modernen Kultur. 1924.
- 174 四 Rickert, H. — Gegenstand der Erkenntnis. 1921.
- 174 五 Rickert, H. — Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. 3. Aufl. 1921.
- 176 六 Rickert, H. — Das Eine, die Einheit und die Eins. 1924.
- 177 七 Rothacker, E. — Einleitung in die Geisteswissenschaften. 2. Aufl. 1930.
- 178 八 Royce, J. — Lectures on Modern Idealism. 1923.
- 179 九 Ruge, A. — Das Problem der Freiheit in kants Erkenntnistheorie. 1910.
- 180 〇 Russell, B. — Introduction to Mathematical Philosophy. 1920.

- 1 八 1 Russell, B. — The Problems of Philosophy. 1928.
- 1 八 2 Scheler, M. — Ethik. 3 Aufl. 1927.
- 1 八 3 Scheler, M. — Soziologie des Wissens. 1924.
- 1 八 4 Scheler, M. — Die Formen des Wissens und die Bildung. 1925.
- 1 八 5 Scheler, M. — Mensch und Geschichte. 1929.
- 1 八 6 Scheler, M. — Philosophische Weltanschauung. 1929.
- 1 八 7 Scheler, M. — Die transzendentele und die psychologische Methode. 2 Aufl. 1922.
- 1 八 8 Scheler, M. — Die Stellung des Menschen im Kosmos. 1930.
- 1 八 9 Scheler, M. — Vom Ewigen im Menschen. 1933.
- 1 九 0—1 九 1 Scheler, M. — Christentum und Gesellschaft. 1 & 2 Halb-band. 1924.
- 1 九 2 Scheler, M. — Wesen und Formen der Sympathie. 3 Aufl. 1926.
- 1 九 3 Schellings Philosophie. (Deut. Bibliothek)
- 1 九 4 Schelling F. W. J. v. — Bruno. (Philos. Bibliothek)
- 1 九 5 Schelling F. W. J. v. — Menschliche Freiheit. (Philos. Bibliothek)
- 1 九 6 Schelling, F. W. J. v. — Philosophie der Natur. (Philos. Bibliothek)
- 1 九 7 Schleiermacher, F. E. D. — Ueber die Religion. 1920.
- 1 九 八 Selby-Bigge. — Hume's Treatise. 1902.

- 一 九 九 — 一 〇 〇 Sigwart, C. v. — Logik. 2 Bde. 4 Aufl. 1921.
 一 〇 〇 | Simmel, G. — Die Probleme der Geschichtsphilosophie. 1922.
 一 〇 〇 | Simmel, G. — Philosophische Kultur. 3 Aufl. 1911.
 一 〇 〇 || Simmel, G. — Goethe. 5 Aufl. 1923.
 一 〇 〇 〇 — 一 〇 〇 〇 Smith, A. — Theorie der ethischen Gefühle 2 Bde. (Philos. Bibliothek)
 一 〇 〇 〇 — 一 〇 〇 〇 Spengler, O. — Der Untergang des Abendlandes. 2 Bde. 1923.
 一 〇 〇 〇 — 一 〇 〇 〇 Spinoza, B. — Sämtliche Werke (C. Gebhardt Ausg.) 3 Bde. 1 Bd. 1924, 2 Bd. 1921, 3 Bd. 1914.
 一 〇 〇 〇 | Spranger, E. — Lebensformen. 6 Aufl. 1927.
 一 〇 〇 〇 || Stadler, A. — Kants Teleologie und ihre erkenntnistheoretische Bedeutung. 1912.
 一 〇 〇 〇 || Stammler, R. — Die materialistische Geschichtsauffassung. 1927.
 一 〇 〇 〇 〇 — 一 〇 〇 〇 〇 Taine, H. — Philosophie de l'art. 2 toms.
 一 〇 〇 〇 〇 | 〇 〇 〇 Taylor, Th. ed. by G. R. S. Mead — Select Works of Plotinus. 1914.
 一 〇 〇 〇 〇 〇 Thomas v. A. — Ausgewählte Schriften. (von F. Schreyvogel) 1923.
 一 〇 〇 〇 〇 〇 Tisserand, P. — Oeuvres de Maine de Biran. Tom. II 1922.
 一 〇 〇 〇 〇 〇 Tönnies, F. — Hobbes. (Frommanns Klassiker) 1925.
 一 〇 〇 〇 〇 — 一 〇 〇 〇 〇 Vaihinger, H. — Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft. 2 Bde. 2 Aufl. 1921.
 一 〇 〇 〇 〇 〇 Vogel, P. — Hegels Gesellschaftsbegriff. 1925.

- 111111 Vorlander, K. — Kant, Schiller, Goethe. 2 Aufl. 1923.
 111112 Windelband, W. — Philosophie im Beginn des XX. Jahrhunderts. 2 Aufl. 1907.
 111113 Windelband, W. — Der Wille zur Wahrheit. 1909.
 111114 Windelband, W. — Platon (Frommanns Klassiker). 1923.
 111115 Windelband, W. — Die Philosophie im deutschen Geistesleben des XIX. Jahrhunderts. 2 Aufl. 1909.
 111116 Windelband, W. — Die Erneuerung des Hegelianismus. 1910.
 111117 Windelband, W. — Die Prinzipien der Logik. 1913.
 111118 Windelband, W. — Vom System der Kategorien. 1900.
 111119 — 111120 Windelband, W. — Geschichte der neueren Philosophie. 2 Bde. 1922.
 111121 Windelband, W. — Ueber Willensfreiheit. 1923.
 111122 Windelband, W. — Lehrbuch der Geschichte der Philosophie. 11 Aufl. 1924.
 111123 Windelband, W. — Einleitung in die Philosophie. 3 Aufl. 1923.
 111124 — 111125 Windelband, — Präludien. 2 Bde. 1924.
 111126 Weber, M. — Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. 1922.
 111127 Wentscher, M. — Geschichte des Kausalproblems. 1921.
 111128 — 111129 Wundt, W. — System der Philosophie. 2 Bde. 1919.
 111130 Wundt, W. — Elemente der Völkerpsychologie. 1913.

- ㉔ ㉔ ㉔ Eucken, R. — Die Lebensanschauungen der grossen Denker. 1922.
- ㉔ ㉔ ㉔ — ㉔ ㉔ ㉔ Hartmann, N. — Die Philosophie des deutschen Idealismus. 2 Bde. 1923, 1929.
- ㉔ ㉔ ㉔ Hartmann, N. — Das Problem des geistigen Seins. 1933.
- ㉔ ㉔ ㉔ Kant, I. — Metaphysik der Sitten. (Philos. Bibliothek)
- ㉔ ㉔ ㉔ Marx & Engels, — Deutsche Ideologie. (Gesamtausg.)
- ㉔ ㉔ ㉔ Rickert, H. — System der Philosophie. 1. 1921.
- ㉔ ㉔ ㉔ ㉔ Schlund, E. — Die philosophischen Probleme des Kommunismus. 1922.
- ㉔ ㉔ ㉔ ㉔ Tönnies, F. — Gemeinschaft und Gesellschaft. 7 Aufl. 1926.
- ㉔ ㉔ ㉔ ㉔ — ㉔ ㉔ ㉔ Logos. 17 Bde. 1910-1923.

II

- ㉔ ㉔ Ahrens, H. — Cours de droit naturel ou de philosophie du droit. Tom. I. 7 éd. 1875.
- ㉔ ㉔ Baumgarten, A. — Die Wissenschaft von Recht und ihre Methode. 1920.
- ㉔ ㉔ Bentham, J. — An Introduction to the Principles of Morals and Legislation. 1907.
- ㉔ ㉔ Bentham, J. — Theory of Legislation. tr. from the French of Etienne Dumont by R. Hildreth 2 ed. 1871.
- ㉔ ㉔ Bernheimer, E. — Probleme der Rechtsphilosophie. 1927.
- ㉔ ㉔ Berolzheimer, F. — The World's Legal Philosophies. 1924.

- 卅 Binder, J. — Grundlegung zur Rechtsphilosophie. 1935.
 卍 Binder, Busse, Larenz. — Einführung in Hegels Rechtsphilosophie. 1931.
 华 Binder, J. — Philosophie des Rechts. 1925.
 丨〇 Binder, J. — Rechtsbegriff und Rechtsidee. 1915.
 丨丨 Busse, M. — Hegels Phänomenologie des Geistes und der Staat. 1931.
 丨丨 Cassirer, Erlich — Natur- und Völkerrecht. 1919.
 丨丨 Charmont, J. — La renaissance du droit naturel. 2 éd. par G. Morin. 1927.
 丨卍 Ehrlich, E. — Grundlegung der Soziologie des Rechts. 1929.
 丨卞 Ehrlich, E. — Beiträge zur Theorie der Rechtsquellen. Teil I 1902.
 丨卞 Ehrlich, E. — Die juristische Logik. 1918.
 丨卞 Emge, C. A. — Geschichte der Rechtsphilosophie. 1931.
 丨卞 Flavius, G. — Der Kampf um die Rechtswissenschaft. 1906.
 丨九 Fries, J. F. — Philosophische Rechtslehre und Kritik aller positiven Gesetzgebung. 1803.
 丨〇 Fuchs, W. — Die Zukunft der Rechtswissenschaft. 1933.
 丨丨 Gardozo, N. — The Growth of the Law. 1927.
 丨丨丨—丨丨丨 Gény, F. — Méthode d'interprétation et sources en droit privé positif 2 éd. 2 toms. 1919.
 丨卍 Gray, J. C. — The Nature and Sources of the law. 1921.

- ||H Haensel, W. — Kants Lehre von Widerstandsrecht. 1926.
- ||K Harms, F. — Rechtsphilosophie. 1889.
- ||P Hegel, G. W. F. — Grundlinien der Philosophie des Rechts. (Lasson. g. W. VI)
- ||R Hegel, G. W. F. — Schriften zur Politik und Rechtsphilosophie. (Philos. Bibliothek)
- ||F Hegel, G. W. F. — Eigenhändige Randbemerkungen zu seiner Rechtsphilosophie. (Philos. Bibliothek)
- ||O Hensel, A. — Grundrechte und politische Weltanschauung. 1931.
- ||I Heucke, A. — Einführung in die Rechtsphilosophie. 1923.
- ||II Hobhouse, L. T. — The Metaphysical Theory of the State. 1926.
- ||III Hoffmeister, J. — Die Problematik des Völkerbunds bei Kant und Hegel. 1934.
- ||IV Husserl, G. — Recht und Welt. 1929.
- ||H Jarusalem, W. — Soziologie des Rechts. 1 Bd. Gesetzmäßigkeit und Kollektivität. 1925.
- ||K Jhering, R. V. — Kampf ums Recht. 20 Aufl. 1921.
- ||P Jhering, R. V. — Der Kampf ums Recht. 21 Aufl. 1925.
- ||R—III Jhering, R. V. — Der Zweck im Recht. 2 Bde. 1923.
- ||O Kantorowicz, H. — Rechtswissenschaft und Soziologie. 1911.
- ||I Kaufmann, F. — Kritik der neukantischen Rechtsphilosophie. 1921.
- ||II Kaufmann, F. — Logik und Rechtswissenschaft. 1922.

- 四三 Kelsen, H. — Reine Rechtslehre. 1931.
- 四四 Kelsen, H. — Der soziologische und der juristische Staatsbegriff. 1922.
- 四五 Kelsen, H. — Die philosophische Grundlegung der Naturrechtslehre und des Rechtspositivismus. 1928.
- 四六 Kelsen, H. — Rechtswissenschaft und Recht. 1922.
- 四七 Kelsen, H. — Staatsform und Weltanschauung. 1933.
- 四八 Larenz, K. — Rechts- und Staatsphilosophie der Gegenwart. 1931.
- 四九 Larenz, K. — Das Problem der Rechtsgeltung. 1929.
- 五〇 Larenz, K. — Deutsche Rechtserneuerung und Rechtsphilosophie. 1934.
- 五一 Laserson, M. — Die russische Rechtsphilosophie. 1933.
- 五二—五三 Lioy, D. — The Philosophy of Right. 2 Vols. 1891.
- 五四 Lioy, D. — Die Philosophie des Rechts. 1906.
- 五五 Löwenstein, A. — Rechtsbegriff als Relationsbegriff. 1915.
- 五六 Mallachow, R. — Rechte kenntnistheorie und Fiktionenlehre. 1922.
- 五七 Marcq, S. — Substanz- und Funktionsbegriff in der Rechtsphilosophie. 1925.
- 五八 Mayer, M. E. — Rechtsphilosophie. 1922.
- 五九 May, G. — Introduction à la science du droit.
- 六〇 Merkel, A. — Juristische Enzyklopädie. 1922.

- 六〇 Montesquieu, — *Esprit des lois*. 1872.
 六一 Nicolai, H. — *Rasse und Recht*. 1933.
 六二 Petrazycki, L. v. — *Methodologie der Theorien des Rechts und der Moral*. 1933.
 六三 Piot, A. — *Droit naturel et réalisme*. 1930.
 六四 Pollock, F. — *A First Book of Jurisprudence*. 1932.
 六五 Post, A. H. — *Grundriss der ethnologischen Jurisprudenz*. Allg. Teil. 1895.
 六六 Pound, R. — *An Introduction to the Philosophy of Law*. 1924.
 六七 Pound, R. — *Interpretations of Legal History*. 1923.
 六八 Pound, R. — *The Spirit of the Common Law*. 1921.
 六九 Pufendorf, S. — *Le droit de la nature et des gens, ou système général*. 2 toms. 1712.
 七〇—七一 Redbruch, G. — *Grundzüge der Rechtsphilosophie*. 1914.
 七二 Redbruch, G. — *Der Mensch im Recht*. 1927.
 七三 Redbruch, G. — *Einführung in die Rechtswissenschaft*. 5-6 Aufl. 1925.
 七四 Redbruch, G. — *Einführung in die Rechtswissenschaft*. 7 u. 8 Aufl. 1929.
 七五 Reinach, A. — *Gesammelte Schriften*. 1921.
 七六—七七 Rosenzweig, F. — *Hegel und der Staat*. 2 Bde. 1920.
 七八 Rosz bath, J. J. — *Die Perioden der Rechtsphilosophie*. 1924.

- 八〇 Salomon, M. — Grundlegung zur Rechtsphilosophie. 2. Aufl. 1925.
- 八一 Salmund, J. — Jurisprudence. 1924.
- 八二 Sander, F. — Kelsens Rechtslehre. 1923.
- 八三—八四 Sander, F. — Staat und Recht. 2 Bde. 1922.
- 八五 Savigny, F. C. v. — Vom Beruf unsrer Zeit für Gesetzgebung und Rechtswissenschaft. 3. Aufl. 1892.
- 八六 Schmitt, C. — Ueber die drei Arten des rechtswissenschaftlichen Denkens. 1934.
- 八七 Schulz, H. — Fichte, Rechtslehre. 1920.
- 八八 Sinzheimer, H. — Das Problem des Menschen im Recht. 1933.
- 八九 Sommer, F. — Kritischer Realismus und Positive Rechtswissenschaft. Bd. 1. 1929.
- 九〇 Stammer, R. — Wirtschaft und Recht. 5. Aufl. 1924.
- 九一 Stammer, R. — Lehrbuch der Rechtsphilosophie. 2. Aufl. 1924.
- 九二—九三 Stammer, R. — Rechtsphilosophisch. Abhandlungen und Vorträge. 2 Bde. 1925.
- 九四 Stammer, R. — Sozialismus und Christentum. 1920.
- 九五 Stammer, R. — Rechts- und Staatstheorien der Neuzeit. 1925.
- 九六 Stammer, R. — Theorie der Rechtswissenschaft. 1923.
- 九七 Stephani, H. — Anmerkungen zu Kants metaphysischen Anfangsgründen der Rechtslehre. 1797.
- 九八 Tarde, G. — Les transformations du droit. 1922.

- 九九 Tönnies, F. — Thomas Hobbes, The Elements of Law. 1928.
- 一〇〇 Trost zu Solz. — Hegels Staatsphilosophie und das international Recht. 1932.
- 一〇一 Verdross, A. v. — Die Einheit des rechtlichen Weltbildes. 1923.
- 一〇二 Vinogradoff, P. — Custom and Right. 1925.
- 一〇三 Walz, G. Z. — Die Staatsidee des Rationalismus und der Romantik und die Staatsphilosophie Fichtes. 1928.
- 一〇四 Wielikowski, G. A. — Die Neukantianer in der Rechtsphilosophie. 1914.
- 一〇五 Wieser, Wengler, Klein. — Der Staat, das Recht und die Wirtschaft des Bolschewismus. 1925.
- 一〇六 Wolf, E. — Grotius, Pufendorf, Thomasius. 1927.
- 一〇七 Wundt, M. — Staatsphilosophie. 1923.
- 一〇八—一〇九 Austin, J. — Jurisprudence. 2 Vols. 1911.
- 一一〇 Kantorowicz, H. — Zur Lehre vom richtigen Recht. 1909.
- 一一一 Kohler, J. — Lehrbuch der Rechtsphilosophie. 3 Aufl. 1923.
- 一一二 Zeitschrift für Rechtsphilosophie. Bd. 2. Ht. 3. 1919.
- 一一三 Wundt, W. — Völkerpsychologie. Bd. 9. (Recht) 1918.
- 一一四 Stammler, R. — Die Lehre von dem richtigen Rechte. 2 Aufl. 1926.
- 一一五 Radbruch, G. — Rechtsphilosophie. 1932.
- 一一六 Pound, R. — Law and Morals. 1924.

1 | 1 7 Paschukanis, E. — Allgemeine Rechtslehre und Marxismus. 1929.

III

- I Amira, K. — Grundriss des Germanischen Rechts. 1913.
- II Ashley, C. D. — Law of Contracts. 1911.
- III Bachofen, J. J. — Mutterrecht und Urreligion. 1927.
- IV Bela Kun. — Fundamental Laws of the Chinese Soviet Republic. 1937.
- V Binding, K. — Grundriss des deutschen Strafrechts. Allg. Teil. 1913.
- VI Bonnecase, J. — La notion de droit en France au dix-neuvième siècle. 1919.
- 7 Brunner-Heymann. — Grundzüge der deutschen Rechtsgeschichte. 1923.
- 8 Buchholz. — Verwaltungsschutz in Sowjetrusland.
- 9 Bühler. — Arbeitsrecht. Teil I. 1926.
- 10 Burchardi, G. — Grundzüge des Rechtssystems der Römer. 1822.
- 11 Burgess, E. W. — Political Science and Constitutional Law.
- 12 Chanson, P. — Les droits du travailleur et le corporatisme. 1935.
- 13 Commons, J. R. & J. B. Andrews. — Principles of La'or Legislation. rev. ed. 1927.
- 14 Dalloz. — Précis de législation industrielle. 1930.

- 一五 Darmstraedter, — Das Wirtschaftsrecht. 1928.
- 一六 Dicey, A. — Law of the Constitution.
- 一七 Dicey, A. — Law and Opinion in England. 1919.
- 一八 Diehl, K. — Die rechtlichen Grundlagen des Kapitalismus. 1929.
- 一九 Duguit, L. — Manuel de droit constitutionnel. 1923.
- 二〇 Duguit, L. — Transformation du droit public. 1925.
- 二一 Duguit, L. — Les transformations générales du droit privé. 1920.
- 二二 Enneccerus, L. — Lehrbuch des bürgerlichen Rechts.
- 二三 Foignet et Dupont, — Manuel élémentaire de législation industrielle. 1921.
- 二四 Flatow, — Kommentar zum Betriebsrätegesetz. 1921.
- 二五 Frankenstein, K. — Der Arbeiterschutz. 1896.
- 二六 Gareis, K. — Das deutsche Handelsrecht. 1909.
- 二七 Garofalo, R. — Criminology. 1914.
- 二八 Geldart, W. M. — Element of English Law. (H. University Library)
- 二九 Gerber, K. F. W. v. — Grundzüge des deutschen Staatsrechts. 1880.
- 三〇 Gierke, O. v. — Die Grundbegriffe des Staatsrechts. 1915.
- 三一 Goldschmidt, H. — Reichswirtschaftsrecht. 1923.

- 三二一 Gumpłowicz, L. — Allgemeines Staatsrecht. 3 Aufl. 1907.
- 三二三 Hamburger, L. — Streik, Aussperrung und Berufsverbände. 1929.
- 三二四 Hutchin, J. B. L. & A. Harrison. — A History of Factory Legislation. with a Preface by S. Webb. 1911.
- 三二五 Hedemann, J. W. — Die Flucht in die Generalklauseln. 1933.
- 三二六 Heinsheimer, K. — Handelsrecht. 1927.
- 三二七 Hodermann, — Das neue Jugendwohlfahrtsrecht.
- 三二八 Hoeniger-Wehrle, — Arbeitsrecht. 1927.
- 三二九 Howell, G. — A Handy Book of the Labour Laws. 1895.
- 三三〇 Hueck-Nipperdey, — Lehrbuch des Arbeitsrechts. Bd. I. 1927.
- 三四一 Hueck-Nipperdey, — Lehrbuch des Arbeitsrechts. 1931.
- 三四二 Jacobi, E. — Grundlehren des Arbeitsrechts. 1927.
- 三四三 Jenks, E. — Short History of English Law. 1924.
- 三四四 Jellinek, G. — Gesetz, Gesetzesanwendung und Zweckmässigkeitserwägung. 1913.
- 三四五 Jellinek, G. — System der subjektiven öffentlichen Rechte. 1919.
- 三四六 Jerusalem, W. — Völkerrecht und Soziologie. 1921.
- 三四七 Jhering, R. v. — Die Jurisprudenz des täglichen Lebens. 14 Aufl. 1931.
- 三四八 Kahn-Freund, — Das soziale Ideal des Reichsarbeitsgerichts. 1931.

- 四九 Kaskel, W. — Arbeitsrecht. 3 Aufl. 1928.
- 五〇 Kaskel, W. — Das neue Arbeitsrecht. 1922.
- 五一 Kelsen, H. — Das Problem der Souveränität. 1928.
- 五二 Kelsen, H. — Allgemeine Staatslehre. 1925.
- 五三 Köhler, B. — Das Recht auf Arbeit als Wirtschaftsprinzip. 1934.
- 五四 Koellreuter, O. — Grundriss der allgemeinen Staatslehre. 1933.
- 五五 Koellreuter, O. — Der nationale Rechtsstaat. 1932.
- 五六 Köhler, J. — Grundlagen des Völkerrechts. 1918.
- 五七 Köhler, J. — Leitfaden des deutschen Strafrechts. 1912.
- 五八 Krause, A. B. — Arbeitsverfassung im neuen Reich. 1934.
- 五九 Lange, H. — Liberalismus, Nationalsozialismus und Bürgerliches Recht. 1933.
- 六〇 Lange, H. — Vom Gesetzestaat zum Rechtsstaat. 1934.
- 六一 Laski, H. J. — Problem of Sovereignty. 1924.
- 六二 Laski, H. J. — Justice and the Law. 1930.
- 六三 Laski, H. J. — Law and Justice in Soviet Russia. 1935.
- 六四 Lawrence, T. J. — Principles of International Law. 1927.
- 六五 Lederer, M. — Grundriss des österreichischen Sozialrechtes. 1924.

- 六六 Linow, F. — Gewerkschaftsbewegung und Arbeitsrecht. 1928.
 六七 Maine, H. — Ancient Law. 1919.
 六八 Pollock, F. — Notes to Maine's Ancient Law.
 六九 Maine, H. — Village Communities.
 七〇 Markby, W. — Elements of Law. 4 ed. 1889.
 七一 Mason, A. T. — Organized Labor and the Law. 1925.
 七二 Melsbach, E. — Deutsches Arbeitsrecht. 1925.
 七三 Mendthal, S. — Über den Begriff des Besitzes. 1878.
 七四 Menger, A. — Das bürgerliche Recht und die desitzlosen Volksklassen. 5. Aufl. 1927.
 七五 Menger, A. — Neue Staatslehre. 4. Aufl. 1930.
 七六 Menger, A. — Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag. 1910.
 七七 Menger, A. — Über die sozialen Aufgaben der Rechtswissenschaft. 2. Aufl. 1905.
 七八 Michel, M. — Das Gemeinwohl in der Arbeitszeitverordnung. 1928.
 七九 Molitor, E. — Das Wesen des Arbeitsvertrages. 1925.
 八〇 Molitor-Hueck-Riezler. — Der Arbeitsvertrag. 1925.
 八一 Morin, G. — La loi et la contrat. 1927.
 八二 Muthesias, H. — Wohlfahrtspflege. 2. Aufl. 1928.

- 八三 Nipperdey, H. C. — Kontrahierungszwang und diktiertter Vertrag. 1920.
- 八四 Nussbaum, A. — Das neue deutsche Wirtschaftsrecht. 1922.
- 八五 Oppermann, W. — Arbeitsrechtliche Beiträge. Ht. 1. 1927.
- 八六 Porthoff, H. — Probleme des Arbeitsrechts. 1920.
- 八七—八九 Pothoff, — Arbeitsrecht. (Zeitschrift f. das gesamte Dienstrecht der Arbeiter, Angestellten und Beamten)
Jahrg. X 1923, XI 24, XII 25.
- 九〇 Porthoff, H. — Das Wesen und Ziel des Arbeitsrechtes. 1922.
- 九一 Porthoff, H. — Arbeitsrechts. 1920.
- 九二 Rational Basis of Legal Institutions. by Various Authors, intro. by O. W Holmes. 1923.
- 九三 Renner, K. — Die Rechtsinstitute des Privatrechts. 1929.
- 九四 Richter, L. — Die faschistische Arbeitsverfassung. 1933.
- 九五 Richter, L. — Arbeitsrecht als Rechtsbegriff. 1923.
- 九六 Les codes de la russie soviétique. 1925.
- 九七 Salomon, A. — Leitfaden der Wohlfahrtspflege. 1921.
- 九八 Sannuels, H. — Law Relating to Industry. 1931.
- 九九—一〇四 Savigny, F. C. v. — Geschichte des Römischen Rechts. 1 Aufl. 6 Bde. 1815-31.
- 一〇五—一一一 Savigny, F. C. v. — System des heutigen Römischen Rechts 8 Bde. 1840-49

- 1 1 111 Heuser, — Sachen-Quellen-Register zu Savignys System. 1851.
- 1 1 1 12 Schulz, G. — Abgrenzung zwischen Unfallversicherung und Krankenversicherung. 1928.
- 1 1 1 13 Schwarz, G. — Arbeitsrecht, Wirtschaftsrecht. 1925.
- 1 1 1 1 4 Schwerin, C. v. — Grundzüge der deutschen Rechtsgeschichte. 1934.
- 1 1 1 1 5 Sinzheimer, H. — Ein Arbeitstarifgesetz. 1916.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 6 — 1 1 1 1 7 Sinzheimer, H. — Der korporative Arbeitsnormenvertrag. 2 Bde. 1907.
- 1 1 1 1 1 8 Sinzheimer, H. — Die soziologische Methode in der Privatrechtswissenschaft. 1909.
- 1 1 1 1 1 9 Sinzheimer, H. — Ueber den Grundgedanken und die Möglichkeit eines einheitlichen Arbeitsrechtes für Deutschland. 1914.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 1 Sinzheimer, H. — Grundzüge des Arbeits echts. 1927.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 2 Sternberg, T. — Das Verbrechen in Kultur und Seelenleben der Menschheit. 1912.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 3 Stier-Somlo, — Reichsverfassung. 3 Aufl. 1925.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 4 Tilka, — Das Recht der Ordnung der nationalen Arbeit. 1934.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 5 Tönnies, F. — Der Kampf um das Sozialistengesetz, 1878. 1929.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 6 Verdross, A. v. — Verfassung der Völkerrechtsgemeinschaft.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 7 Die Verfassung des deutschen Reichs von 1919.
- 1 1 1 1 1 1 1 1 8 Wagner, A. — Staat und das Versicherungswesen. 1 Hft. 1881.

- | 110 Wertheimer, L. — Entwicklungstendenzen im deutschen Privatrechte. 1928.
- | 111 | Wörner, G. — Der demokratische Gedanke im deutschen Sozialrecht. 1925.
- | 1111 | Arbeitsrecht und Arbeiterschutz.
- | 11111 | Kalec und Gros. — Taschenbuch des Arbeitsrechts. 1928.
- | 111111 | Vinogradoff, P. — Common-Sense in Law. (II University Library)
- | 1111111 | Vinogradoff, p. — Roman Law in Mediaeval Europe. 1929.
- | 11111111 | Bojanowski, v. — Das englische Fabrik- und Werkstättengesetz von 1878. 1881.
- | 111111111 | Hueck, A & H. C. Nipperdey. — Lehrbuch des Arbtisrechts. Bd. I 1931.
- | 1111111111 | Jhering, R. v. — Geist des römischen Rechts. 3 Teile, 4 Bde. 1923-26.
- | 11111111111 | Jhering, R. v. — Geist des römischen Rechts. Supplement= Band. 2 Aufl. 1924.
- | 111111111111 | Jellinek, G. — Allgemeine Staatslehre. 3 Aufl. 1922.
- | 1111111111111 | Kelsen, H. — Hauptprobleme der Staatsrechtslehre. 1923.
- | 11111111111111 | Liszt, F. v. — Lehrbuch des deutschen Strafrechts. 1922.

II

- | Aristoteles, — Politik. (Philos. Bibliothek)
- | Adler, M. — Politische oder soziale Demokratie. 1926.

- 三 Bagehot, W. — *Physics and Politics*. 1891.
- 四 Bentham, J. — *A Fragment on Government*. 1891.
- 五 Bakunin, M. — *Goit und Staat*. 1922.
- 六—八 Bluntschli, J. K. — *Lehre von modernen Staat*. 3 Bde. 1875-76.
- 九 Bouglé, C. et J. Raffault. — *Éléments de sociologie*. 1926.
- 一〇 Bouglé, C. — *Le solidarisme*. 1924.
- 一一 Bouglé, C. — *Qu'est-ce que la sociologie?* 1925.
- 一二 Bourgeois, L. — *Solidarité*. 1925.
- 一三—一四 Bryce, J. — *Modern Democracies*. 2 Vols. 1921.
- 一五 Barker, E. — *Political Thought in England*. (H. University Library)
- 一六 Baxa, J. — *Einführung in die romantische Wissenschaft*. 2 Aufl. 1931.
- 一七 Bosanquet, B. — *The Philosophical Theory of the State*. 1930.
- 一八 Coker, F. W. — *Readings in Political Philosophy*. 1926.
- 一九 Cole, G. D. H. — *Theories and Forms of Political Organisation*. 1932.
- 二〇 Cole, G. D. H. — *Guild Socialism re-stated*. 1921.
- 二一 Cole, G. D. H. — *The World of Labour*. 1919.
- 二二 Cole, G. D. H. — *Social Theory* 1923.

- 二三三 Cole, G. D. H. — An Introduction to Trade Unionism. 1918.
- 二三四 Cole, G. D. H. — Modern Theories and Forms of Industrial Organisation. 1932.
- 二三五—二三六 Comte, A. — *Soziologie*. 2 Aufl. 3 Bde. 1923.
- 二二六 Durkheim, É. — *Les règles de la méthode sociologique*. 1919.
- 二二七 Durkheim, É. — *Sociologie et philosophie*. 1924.
- 三〇—三一〇 Dunning, W. A. — *History of Political Theories*. 2 Vols.
- 三一一 Davidson, W. L. — *Political Thought in England*. (H. University Library)
- 三一二 Freyer, H. — *Der Staat*. 1926.
- 三三四 Freyer, H. — *Soziologie als Wirklichkeitwissenschaft*. 1930.
- 三三五 Foster, M. B. — *The Political Philosophies of Plato and Hegel*. 1935.
- 三三六 Gettel, R. G. — *History of Political Thought*. 1924.
- 三三七 Gumpłowicz, L. — *Geschichte der Staatstheorien*. 1926.
- 三三八 Gumpłowicz, L. — *Der Rassenkampf*. 2 Aufl. 1909.
- 三三九 Gumpłowicz, L. — *Die soziologische Staatsidee*. 1902.
- 三四〇 George, H. — *Progress and Poverty*. 1927.
- 三四一 Gooch, G. P. — *Political Thought in England*. (H. University Library)
- 三四二 Gustave le Bon. — *La psychologie politique*. 1926.

- 四三 Hartmann, E. — Gedanken über Staat, Politik, Sozialismus. (Kröners Ausg.)
- 四四 Hobbes, Th. — Leviathan. (Everyman's Library)
- 四五 Jerusalem, F. W. — Gemeinschaft und Staat. 1930.
- 四六—四七 Jowett, B. — The Politics of Aristotle. Vol. I 1885. Vol. II Pt. 1. 1885.
- 四八 Krabbe, H. — The Modern Idea of the State. 1922.
- 四九 Laski, H. J. — A Grammar of Politics. 2 ed. 1931.
- 五〇 Laski, H. J. — Liberty in the Modern State. 1930.
- 五一 Laski, H. J. — State in Theory and Practice. 1935.
- 五二 Laski, H. J. — An Introduction to Politics. 1931.
- 五三 Laski, H. J. — Political Thought in England. (H. University Library)
- 五四 Laski, H. J. — Communism (H. University Library)
- 五五 Lichtenberger, J. P. — Development of Social Theory. 1924.
- 五六 Lenz, F. — Staat und Marxismus. 1922.
- 五七 Locke, J. — On Civil Government. (Everyman's Library)
- 五八 Machiavelli, N. — Il Principe. 1924.
- 五九 Maclver, R. M. — Community. 3 ed. 1924.
- 六〇 Mannheim, K. — Ideologie und Utopie. 1930.

- 六 I Mannheim, K. — Mensch und Gesellschaft im Zeitalter des Umbaus. 1935.
- 六 II Mannheim, K. — Die Gegenwartsaufgaben der Soziologie. 1932.
- 六 III Mc Dougall, W. — An Introduction to Social Psychology. 1916.
- 六 IV Morgan, L. H. — Ancient Society.
- 六 V Müller, A. — Vom Geiste der Gemeinschaft. (Kroners Ausg.)
- 六六—六七 Müller, A. — Die Elemente der Staatskunst. 2 Bde. 1922.
- 六八 Oppenheimer, F. — Die Logik der soziologischen Begriffsbildung. 1925.
- 六九 Oppenheimer, F. — Der Staat. 1923.
- 七〇 Pollock, F. — History of the Science of Politics. 1920.
- 七一 Platon, — Der Staat. (Philos. Bibliothek)
- 七二 Rehn, H. — Geschichte der Staatsrechtswissenschaft. 1896.
- 七三 Schmitt, C. — Der Begriff des Politischen. 1931.
- 七四 Sombart, W. — Soziologie. 1923.
- 七五 Spann, O. — Gesellschaftslehre. 2 Aufl. 1923.
- 七六 Simmel, G. — Soziologie. 2 Aufl. 1922.
- 七七 Sultan, H. — Gesellschaft und Staat bei Karl Marx und Friedrich Engels. 1922.
- 七八 Spencer, H. — The Study of Sociology. 1877.

- 七九—八〇 Spencer, H. — First Principles. 2 Vols. 1910-11.
- 八一 Seiss, H. — Das Wesen der Gesellschaft und des Staates. 1926.
- 八二 Tarde, G. — Les lois de l'imitation. 1921.
- 八三 Tarde, G. — Die sozialen Gesetze. 1898.
- 八四 Tönnies, F. — Einführung in die Soziologie. 1931.
- 八五 Vierkandt, A. — Staat und Gesellschaft in der Gegenwart. 3 Aufl. 1929.
- 八六 Wittfogel, K. A. — Die Wissenschaft der bürgerlichen Gesellschaft. 1922.
- 八七 Wittfogel, K. A. — Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft 1924.
- 八八 Ward, L. F. — Pure Sociology. 2 ed. 1921.
- 八九—九〇 Wiese, L. v. — Allgemeine Soziologie. 2 Bde. 1924.
- 九一 Wallas, G. — Human Nature in Politics. 1916.
- 九二—九四 Zacharias, K. S. — Vierzig Bücher vom Staat. 3 Bde. 1839-41.

V

- I—II Ashley, W. J. — Economic History. 2 Vols. 1919.
- III Ashley, W. J. — Economic Organisation of England. 1919.
- IV Below, G. v. — Probleme der Wirtschaftsgeschichte. 1920.

- Ⓕ Bendixen, F. — Das Wesen des Geldes. 1922.
- Ⓖ Blum, — Labour Economics. 1925.
- Ⓙ Bogdanoff, A. — A Short Course of Economic Science. 1927.
- Ⓚ Bonar, J. — Philosophy and Political Economy. 3 ed. 1922.
- Ⓛ Bucharin, N. — Oekonomie der Transformationsperiode. 1922.
- Ⓞ—| | Bücher, K. — Die Entstehung der Volkswirtschaft. 2 Bde. 1925-26.
- | | | Cunningham, W. — Outlines of English Industrial History. 1913.
- | | | Diehl, K. — Theoretische Nationalökonomie. Bd. I. 1922.
- | | | Cannan, E. — Lectures of Adam Smith. 1896.
- | | | Gide, et Rist. — Histoire des doctrines économiques.
- | | | 一六—| | Gonnard, R. — Histoire des doctrines économiques. 3 toms. 1921-22.
- | | | 九 Goldschmidt, H. — Das neue Zeitalter der Organisationswirtschaft. 1931.
- | | | 〇 Gonner, E. C. K. — Ricardo's Political Economy. 1927.
- | | | Hilferding, R. — Das Finanzkapital. 1927.
- | | | Hobson, J. A. — Evolution of Modern Capitalism.
- | | | | Ingram, J. K. — History of Political Economy. 1923.
- | | | 四 Knies, K. — Die politische Oekonomie. 1883.

- 二三五 Lederer, E. — Grundzüge der oekonomischen Theorie.
- 二三六 List, F. — Das nationale System der politischen Oekonomie. 1928.
- 二三七 Lexis, W. — Allgemeine Volkswirtschaftslehre. 1926.
- 二三八 Luxemburg, R. — Die Akkumulation des Kapitals. 1923.
- 二三九 Luxemburg, R. — Einführung in die Nationalökonomie.
- 三四〇—三四三 Marx, K. — Das Kapital. (Herausg. von Engels) 4 Bde. 10 Aufl. 1922.
- 三四四—三四五 Marx, K. — Thorien über den Mehrwert. 5 Aufl. 2 Bde. 1923.
- 三四六 Marx, K. — Das Kapital. Bd. 1 (Volksausgabe) 1923.
- 三四七 Marx, K. — Das Kapital. (Herausg. von Institut) 4 Bde. 1932.
- 三四八 Marx, K. — Value, Price and Profit.
- 三四九 Marx, K. — Lohn, Preis und Profit.
- 三五〇 Marx, K. — Lohnarbeit und Kapital.
- 三五一 Malthus, T. R. — An Essay on Population. (Everyman's Library)
- 三五二 Mill, J. S. — Principles of Political Economy. (by Ashley.) 1923.
- 三五三 Münsterberg, H. — Philosophie der Werte. 1921.
- 三五四 Passow, R. — Betrieb, Unternehmung, Konzern. 1925.
- 三五五 Philippovich, E. — Aufgabe und Methode der politischen Oekonomie. 1886.

- 四六 Postgate, — A Short History of the British Workers. 1926.
- 四〇 Price, L. L. — English Commerce and Industry. 1904.
- 四一 Price, L. L. — Political Economy in England. 1922.
- 四二 Renner, K. — Staatswirtschaft, Weltwirtschaft und Sozialismus. 1929.
- 四三 Rowe, — Gide's Principles of Political Economy. 1924.
- 四四 Renner, K. — Wirtschaft als Gesamtprozess. 1924.
- 四四 Simmel, G. — Philosophie des Geldes. 4 Aufl. 1922.
- 四六—四七 Smith, A. — The Wealth of Nations. (by Cannan) 2 Vols. 1925.
- 四八 Soda, K. — Geld und Wert. 1909.
- 四九 Soda, K. — Die logische Natur der Wirtschaftsgesetz. 1911.
- 六〇—六一 Schmoller, G. — Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. 2 Bde. 1923.
- 六一 Salin, E. — Geschichte der Volkswirtschaftslehre. 1923.
- 六三 Stolzmann, R. — Grundzüge einer Philosophie der Volkswirtschaft. 1920.
- 六四 Stolzmann, R. — Wesen und Ziele der Wirtschaftsphilosophie. 1923.
- 六五 Spann, O. — Fundament der Volkswirtschaftslehre. 1923.
- 六六 Spann, O. — Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre. 1930.
- 六七 Somburt, W. — Das ökonomische Zeitalter. 1935.

- 六七 Saranyi-Unger, T. — Geschichte der Wirtschaftsphilosophie. 1931.
- 六七 Varga, E. — Die Krise der kapitalistischen Weltwirtschaft. 1922.
- 七〇 Volkenborn, K. — Die theoretische Nationalökonomie als Geisteswissenschaft. 1928.
- 七一 Weber, M. — Wirtschaftsgeschichte. 2. Aufl. 1924.
- 七二 Petry, — Der soziale Gehalt der Marx'schen Werttheorie. 1916.

VI

- 一—二 Adler, M. — Lehrbuch der materialistischen Geschichtsauffassung. 2 Bde. 1930.
- 三 Auerbach, — Marx und die Gewerkschaften. 1922.
- 四 Bebel, A. — Die Frau und der Sozialismus. 1923.
- 五 Becker, — Diktatur und Führung. 1935.
- 六—七 Beer, M. — History of British Socialism. 2 Vols. 1920.
- 八 Below, G. v. — Die deutsche Geschichtsschreibung. Abt. 1. 2. Aufl. 1924.
- 九 Borchardt, J. — Der historische Materialismus. 1922.
- 一〇 Borgh, R. — Grundzüge der Sozialpolitik. 1904.
- 一一 Brucker, — Sozialversicherung. Bd. V. 1928.
- 一二 Diehl, K. — Ueber Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus. 1932.

- 一三 Diehl, K. — Sozialpolitik (Ausgewählte Lesestücke) 1922.
 一四 Diehl, K. — Die Diktatur des Proletariats und das Räteystem. 1924.
 一五 Goring, H. — Grundsätze der heutigen Staatspolitik. 1933.
 一六 Guizot, F. P. — Histoire de la civilisation. 1873.
 一七—一八 Hecker, — Die Arbeiterfrage. 2 Bde. 1922.
 一九 Henderson, F. — The Case for Socialism.
 二〇—二一 Kautsky, K. J. — Vorläufer des neaeren Sozialismus. 2 Bde. 1920.
 二二 Korfeld, — Soziale Machtversicherung.
 二三—三四 Lassalle, F. — Gesammelte Reden und Schriften. 12. Bde.
 三五 Lewinski, — Origin of Property. 1913.
 三六—三八 Mehring, F. — Marx-Engles Nachlasz. 3 Bde. 3 Aufl. 1920.
 三九—四〇 Mehring, F. — Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. 2 Bde. 1919.
 四一 Mill, J. S. — Subjection of Women. (by S. Coit) 1924.
 四二 Mill, J. S. — On Liberty, Subjection of Women. 1874.
 四三—四四 Mommsen, Th. — Römische Geschichte. 3 Bde. 1865-66.
 四五 Müller, A. — Sozialisierung oder Sozialismus. 1919.
 四六 Proudhon, P. J. — Théorie de la propriété.

- 四八 Ranke, L. v. — Ueber die Epochen der Geschichte. 1921.
- 四九 Rothstein, — From Chartism to Labourism. 1929.
- 五〇 Seligman, — The Economic Interpretation of History. 1907.
- 五一—五二 | Sombart, W. — Der proletarische Sozialismus. 2 Bde. 1924.
- 五三 Sombart, W. — Sozialismus und soziale Bewegung. 1920.
- 五四 Sorel, G. — La décomposition du marxisme.
- 五五 Spengler, O — Preussentum und Sozialismus. 1919.
- 五六 Vorländer, K. — Kant, Fichte, Hegel und der Sozialismus. 1920.
- 五七 Webb, — History of Trade Unionism. 1920.
- 五八 Webb, — Industrial Democracy. 1919.
- 五九 Weber, M. — Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus. 1934.
- 六〇 Weber, M. — Fiches Sozialismus und sein Verhältnis zu Marx'schen Doktrin. 1925.
- 六一 Weber, A. — Der Kampf zwischen Kapital und Arbeit. 1921.
- 六二 Wiese, L. v. — Einführung in die Sozialpolitik. 1921.
- 六三 Wolf, E. — Die soziologischen Grundlagen der Fürsorge und Wohlfahrtspflege. 1927.
- 六四 Hertneck, F. — Karl Marx und die Gewerkschaften.
- 六五 Salvioi, — Kapitalismus im Aletertum.

- 六六 Die Gesellschaft. IV Jahrg. N. I 1927.
- 六七 Vyetleteri. (Bulletin) No. 1-4. 1928.
- 六八 Istoricheski-Obzori. 3 Jahrg. 15 Heft.

この「蔵書」リストは、昭和一七年七月に作成された「立命館文庫蔵版」の『加古文庫目録』である。